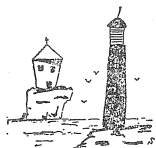


人物を中心とした

## 文化郷土史

—三重県—

森田利吉



## 一 伊勢神宮

伊勢神宮の創始については記・紀の記事に対する疑いから最近種々論議されているが、神宮に対する我が国民の尊信の念は今も昔も全く変わらない。しかも本県の文化の変遷は神宮と切り離しては到底考えられない。とくに、桃山時代以降庶民の参宮が盛行し、御師（御祈禱師の略称）の活動が活発化すると、神宮は全国文化の交流地となった感があった。

荒木田守武の俳諧の創始をはじめ、経済的に恵まれた御師達の芸術方面における活躍はめざましい。このように、東・西日本の接点三重県に神宮のあったことは、他国の人たちの持つ種々の文化が本県に新しいものを産み出させるものとなった。伊勢商人の江戸進出、本居宣長の学問、俳聖松尾芭蕉、竹川竹齋の活動などはそのよい例である。またこの地の利は各地の檀那にお札配りをした御師、全国にその販路をもった白子の伊勢型紙行商人などに多大の便宜を与えた。

三重県はまた海の国、木の国である。志摩の国は前者、昔の伊賀の国や、牟婁地域は後者である。三津の一つといわれた安濃津や、大湊・桑名・鳥羽などが港として果たした役割は大きかった。大湊の角屋の南蛮貿易、熊野水軍の活躍などは史上に名高い。このような海の活動も江戸時代の鎖国により弱められたが、近年になり、稲葉三右衛門等により四日市港が整備され、志摩では御木本幸吉などにより真珠養殖が大きな成果をあげた。

明治維新により江戸時代の制度は大幅に改められ、文明開化の波

も押しよせた。津・龜山・神戸・菰野・桑名・長島・久居・鳥羽・紀州等の各藩は維新の激動の渦に巻きこまれ、江戸時代の間続いた神宮の御師や、各藩の大名と家臣等により形成されて来た文化環境も激変した。では次の時代における郷土文化の担い手にはどんな人たちが故人たちがあったのだろうか。以下項を分けて記してみよう。

## 二 絵画・彫刻・工芸・書道等

**磯部百麟**（一八三五～一九〇六） 日本画家、代々内宮の御師であった磯部家の延長の長男として伊勢市宇治に生まれ、明治四年（一八七一）以来二十年間神宮に奉仕したが、暇を得ては若い時から伊勢市の林棕林に絵を習い、後京都の長谷川玉峰について四条派の流麗な画風を学びながら、そこに雄渾温雅な個性的画法をたて、歴史画家として名高く、明治末京都博覧会で銅賞を得、東洋絵画展覧会で金牌を受けた。

その名声はいよいよ高まり明治三十八年（一九〇五）明治天皇伊勢行幸の際には二見浦の絵を献上した。百麟の門からは中村左洲、伊藤小坡、川口呉川、橋本鳴泉、江村隆章など多くの有名な画家が輩出している。

**中村左洲**（一八七三～一九五一） 日本画家、百麟の門下中、郷土にあって最も多くの秀作を残している。彼は度会郡二見町に生まれ家は代々漁夫であったから明治十三年（一八八〇）小学校に入学、明治十五年退学するという風で、あまり教育はうけていなかった。しかし絵は生まれつき非常に好きで磯部百麟の弟子となり、第四回内国勸業博覧会へ製塩図を出し褒状を受けた。明治二十九年松



中村左洲

方侯爵は彼の作品の優秀なのに感じて彼を京都に伴い、当時の日本画の大家である岸竹堂、今尾景年、鈴木松年、川端玉峰、久保田米偲、木村金秋、織田香齋等に紹介、その教えを受けさせたので、彼の画技は長足の進歩を見せた。

明治三十年以来、鳥羽港の図、群雀図、雪中銀閣図、志海泊船図、美人納涼図、江村春色図、志海の人図、海辺山水図、波浜之図、樵夫休憩図、軍話図、海浜図、満潮、干潮図等を各種展覧会へ出品、大正六年には文部省展覧会出品の「群れる鯛」が入選した。

**伊藤小坡**（一八七三～一九五五） 日本画家、伊勢市に生まれ、若くより絵を良くし、伊勢市の磯部百麟に師事、後に京都の森川曾文、谷口香嶠の門に入り、大正四年（一九一五）第九回文展に「製作の前」を出品して初入選し、その後、文展帝展には毎回出品し、大正六年（一九一七）には、鐵斎、景年、芳文、栖鳳、華香、松園の六匠とともに皇后陛下の御前で揮毫した。

大正十年作の「琵琶記」はフランス、リュクサンブール美術館に収蔵されている。昭和三年竹内栖鳳門に入り、帝展に「秋草と宮仕えせる女達」を出品して昭和六年無鑑査となり、出品作「春日詣」は推薦となった。小坡は京都において四条派の画風を伝えているが歴史画、美人画を得意とし、独自の描法、清新な色彩をもってする典雅な作品を多く残している。

**帆山唯念**（一八二三～一八九四） 日本画家、桑名市輪崇寺の僧で、花洞、花笠、後に花乃舎と号した。若い頃から絵を好み、浮田一恵、渡辺清等に学び、土佐派の温雅な画風をよくした。安政中（一八六〇頃）皇居造営の時、土佐光文、浮田一恵とともに賢聖障子を描く。後本山専修寺の総務となり寺務に専念したが、後年寺務を惟教に譲って画業にいそしんだ。明治十五年（一八八二）内閣勸業博覧会出品画は御物となった。

**平賀龜祐**（一八八九～一九七二） 洋画家、明治二十二年志摩郡片田の漁師の子として生まれた。明治三十九年移民として渡米し、サンフランシスコ美術学校に入学、農夫やコックをして働きながら勉強した。大正三年（一九一四）サンフランシスコ万国博覧会に出品して優等賞を得、大正十四年渡仏してアカデミー、ジュリアンに入り、ルシアン、シモンに師事して日夜画業に精励し、時には絶食の日もあったという。大正十五年「扇を持つ婦人」がル・サロンに入選し、サンマルトル、ティナムで個展を開き、ようやく画家として生計を営み得るようになった。帰米してロスアンゼルスで度々個展を開き好評を博した。昭和二十九年（一九五四）メルサ



平賀龜祐

ロンに「古いバリの街角」を出して金賞およびコロイ賞を受け、フランス政府から美術文化勲章を授与され、また学士院賞を得た。その後四回連続入選したのでサロン会員に

推された。昭和三十六年松方コレクション返還の功により日本政府から勲三等瑞宝章を受け、昭和四十一年喜寿記念に神宮に作品三十点を献納し、画集「平田龜祐」を出版する。昭和四十五年にはフランス政府から最高のジョノール勲章を受け、国際美術協会副会長に推され、また日本政府より勲三等旭日章を授与された。

**川喜田壮太郎**（一九〇四～一九七二） 洋画家、津市に生まれ、父久太夫のあとを受けて川喜田家当主及び百五銀行頭主として令名を馳せ、洋画においても清新で練達した画風を示し創元会運営委員であった。また多年県展運営委員長として県下美術界に貢献するところ大であった。

**川口呉川**（一八七九～一九五七） 日本画家、伊勢市に生まれ、磯部百麟に日本画を学び、京都絵画専門学校卒業後、竹内栖鳳の門下となり、文展、帝展に出品入選十回に及ぶ。主な作品に伊勢御蔭詣の巻、金閣創建図、阿漕浦之巻、二見浦塩田新秋図、参宮街道図、九鬼嘉隆図、南昌寺の信長公、葵祭図、豊稔、信楽の一日等がある。

**橋本鳴泉**（一八八八～一九四九） 日本画家、伊勢市朝熊町に生まれ、最初磯部百麟に師事したが、後京都菊池芳文の門に入り、帰郷後子弟の教育に当たった。

**東佩芳**（一七九九～一八七九） 日本画家、伊勢市川端に生まれ、伊勢市の漢学者東夢亭に嫁した。漢学を夫に、絵を小橋香村に習ったが、後長崎の僧鐵翁に学んで画技が上達した。また詩、歌、茶、盆石等にも嗜み深く習字、裁縫、国文などを子弟に教えた。

**林棕林**（一八一四～一八九八） 日本画家、伊勢市に生まれ、御師であったので彦根の井伊侯に知遇を得、江戸桜田邸に留まり、谷



文晃、渡辺華山、市川米菴、春木南湖、錦木雲潭、椿椿山、大窪詩仏等に交わり大いに得る所があった、門下多く磯部百麟、中野素梅、為田秋斎、溝口春塘等は有名である。

三五）彫刻家伊勢市朝熊町に生まれ、日本画家橋本鳴泉の従兄弟にあたる。伊勢市の彫刻師三宅正直に彫刻を学んだ。大正六年（一九一七）伊勢市浜郷小学校教師となり亀田徳介から彫刻技術の指導を受けた。大正八年上京して日本美術院同人佐藤朝山の弟子となり、後日本美術院研究会員として彫刻に専念する。大正十二年の関東大震災で奈良に移住、そこで古美術を研究した。大正十四年日本美術院院友となり、大正十五年以来郷里に定住する。昭和二年（一九二七）日本美術院同人に推され、昭和十年帝國美術の無院鑑査となった。作品には、猫、鷺、少女立像、鷹、群猿、花園に遊ぶ天女、裸形の少年像、牛等がある。彼の作品は近代彫刻への鋭いひらめきを見せており、一刀一刀心を刻むように木に對した異色のあつた作家として知られている。

森有節（一八〇八～一八八二）陶芸家、文化五年桑名に生まれ桑名の沼波弄山（一七一八～一七七七）により創始された万古焼の中絶を惜しみ、天保二年（一八三一）弟の千秋を伴って小向に移り、新しい窯を築いて製陶を始めた。

我が國を外夷から守るべき方法につき、種々討議するところがあった。また用水溜池の築造をはじめ、製茶、養蚕等を射和地方に奨励、指導するなど國産の増殖に努め、射和文庫を創立してこれを公開し地方文化の発展に寄与するところ甚だ大きかった。彼はこれらの功により大正四年（一九一五）従五位を追贈された。

川喜田半泥子（一八七八～一九六三）陶芸家、大阪市に生まれ県立津中学校を経て早稲田専門學校卒業後、川喜田家十六代の当主として東京都中央区大伝馬町の伊勢店木綿問屋を継ぎ、郷土では百五銀行、三重農工銀行その他の取締役頭取、三重合同電気株式会社社長等として地方実業界の重鎮となった。昭和五年（一九三〇）津市に石水会館を設けて地方の文化事業に貢献した。大正から昭和の初めごろ（一九二一～一九三三ごろ）千歳山に窯を築き独自の考えで作陶した。昭和九年九州、朝鮮に渡り研究の結果、自ら窯を築いて彼独特の芸域をひらき、また「乾山考」を著した。昭和二十二年津市長谷山麓広永に窯を築いて次々に茶碗、水差等、茶陶の名作を製出し、各地で個展を開いて好評を得、北大路魯山人と並び称された。彼は茶を表千家久田也に学び、俳句、俳画をよくした。

伊勢型紙は鈴鹿市寺家町および白子町で江戸時代から盛んに生産されたが、なにごろ細かい文様であるため、細心の注意とたゆまない根気とによる特種な技術が必要であつたから一人前になるには並々ならぬ苦勞があつた。

突彫、縞彫、錐彫、道具彫、糸入等の技術があるが、重要無形文化財技術保持者として指定されている六人のうち、錐彫の六谷紀久男（一九〇七～一九七三）および道具彫の中島秀吉（一八八五～一

慶応三年（一八六七）桑名藩より國産陶器職取締役を命ぜられ、明治年間には各博覽會に出品受賞し、宮中よりお買い上げを受けた。有節の特殊な発明は急須・土瓶などの成型に用いる木型の使用で、作品の内部に龍の文様などを浮出させるために、木型面にその文様を刻んだ。弟千秋とともに帆船唯念に大和絵を習い、盛り上げにより菊花を描き、また、しょうえんじや黒色釉にも成功した。

竹川竹斎（一八〇九～一八八二）先覚者、万古焼の再興をめざして安政三年（一八五六）松阪市射和に窯を築き、射和万古を創始した。有節万古には森有節独自の良さはあつても、乾山の流れをくむ万古焼の持味が欠けているのを飽きたら思つた竹斎は、万古焼の正系を示したい希望から再興万古を志した。しかし彼は実技にはあまり携わらず、その配下に多数の名工を集め、竹斎を中心に陶芸のグループを作っていた。工人の中には、江戸の井田巳斎、京の近藤勇、信樂の奥田弥助、絵付画家多氣郡斎宮村の服部閑鷺などがあり、何れも竹斎好みにに統制され、多くの名品を製出した。しかし文久二年（一八六二）射和万古の売れ行きが思わしくなく、遂に廃窯となった。その後は松阪市下村の佐久間芳麟、勝山等が松阪万古として今も製陶を続けている。

竹斎は幕末の立役者であつた勝海舟、大久保一翁、杉享二、佐藤信淵、松浦武四郎等と親交があり、万葉学者荒木田久老は、彼の外祖父、万古焼の創始者沼波弄山の妻は彼の大叔母であつた。竹斎はこれらの人に負うところ極めて多かつた。嘉永六年（一八五三）ペルリが浦賀に來て以来彼は我が國の海防、神宮の擁護を力説し、護國論、神境攘夷神の八重垣等を著して勝海舟、大久保一翁に送り、

九六八）が死亡し、今四人になっている。

菊山当年男 陶芸家、伊賀上野の人。筒井氏が伊賀上野城主であつたころ、盛んに製作された古伊賀の伝統技術を伝える名手であつた。昭和三十三年（一九五七）県指定無形文化財技術保持者として指定されたが措けもまもなく死亡した。

土井有格（一八一七～一八八〇）書家、津市に生まれ、漢学を川村尚迪、斎藤拙堂等に学んだ。資治通鑑を校正し、嘉永元年（一八四八）以来津藩校有造館の侍講、講官を経て督学となる。書をよくし、草、行、篆、隸に通じ、墨竹に巧みであつた。

野田半谷（一八一九～一八七八）書家、漢学を斎藤拙堂、書を横田半溪に学ぶ。後市河米庵の書風を慕つて一家をなし、篆刻にも長じた。

三井戴星（一八二二～一八八五）書家、松阪市湊町に生まれた。初め巻菱湖に書を学び、中国法帖を研究して隸書に巧みであつた。

松田雪柯（一八二三～一八八一）書家、伊勢市に生まれ、家は代々外宮称宜であつたが、明治以後皇大神宮主典となる。漢学を父適齋、猪飼敬所、谷三山に、書を中西自圭に学んだ。後上京して貴名海屋の門に入り、明治初年度会府立學校教授となり、家塾を開いて漢学、書法を教えた。明治十一年巖谷一六郎に寓し、日下部鳴鶴とも親しかつた。

會野磯齋（一八三五～一九二二）書家、津市片田に住み、津藩の教官となり、明治以後、師範學校、中学校に書道を講じた。書帖、詩文遺稿の著がある。

江川近情（一八五二～一九二二）書家、伊勢市の人で、書を三

井戴星に学ぶ。明治二十五年（一八九二）書学会を起し書道を教え、宇治山田中学校の書道教師となり、絵も巧みであった。

市川塔南（一八五六～一九四五）書家、津市に生まれ、詩文、南画、篆刻をよくし、ことに書は十体に通じ、篆、隸が最もすぐれていた。明治二十八年（一九〇五）篆書の自作「天長節」の詩は、第四回内閣勅業博覧会で一等賞となった。

揮毫した碑も多く、大書にも優れていたから多数の大帳を書いている。泰東書院特別会員、興亜書道聯盟総務であった。

久志本梅莊（一八五五～一九二七）書家、伊勢市宇治に生まれ書を松田雪柯に学び、鑑識に長じ、詩、書画をよくした。明治十八年（一八八五）学習院教授となり、のち高松宮の習字教授となった。

矢土錦山（一八五一～一九二〇）書家、度会郡玉城町田丸に生まれ、若い頃土井肇牙、松田雪柯、藤川三溪に学んだ。二十二歳の時上京して巖谷一六に入門し、後政府に出仕して伊藤博文の知遇をうけ、森槐南とともに公の詩侶として常に陪従した。書は大字よりも中小字をよくした。

### 三 郷土史家等

大西源一（一八八三～一九六一）郷土史家、明治十六年多気郡多気町弟国に生まれ、明治三十年（一九〇七）明和町の坂本の多気郡高等小学校を卒業した。小さい時から秀才であったが、農家に長男として生まれたため卒業後は毎日農業に従事した。彼はあまり体が強くなかったので、大叔父のすすめで十六歳の時薬の行商を始めた。しかし彼は元来史学を最も好んだから、明治三十年のころ（一



大西源一

八九七頃）松阪市の四方弘克、三村清三郎、桜井祐吉等の同志と謀って三重県史談会を起し、会誌を月刊し、三重県に関する重要な研究を次々と発表した。

会誌は明治三十四年（一九〇一）から大正六年（一九一七）まで続けられたが、彼はこのほか歴史地理、国学院雑誌、考古学雑誌、皇学、史林、史学会報、神道史研究、三重の文化等に重要な論文を投稿している。大正四年（一九一五）神宮称宜江見清風の推薦で大神宮史編修を委嘱されることになり以来四十六年間神宮に勤続した。昭和三十五年（一九六〇）国学院大学に提出した「大神宮史要」および「北畠氏の研究」により文学博士となった。また大正十四年（一九二五）以来津市の鈴木敏雄、上野市の服部哲太郎等と三重県史跡名勝天然記念物調査会委員となり、ついで昭和二十六年（一九五二）以後三重県文化財専門委員として、文化財の保護・顕彰に努めた。なお昭和二十二年（一九四九）より鈴木敏雄等と三重郷土会を結成、郷土文化財の発見、保護、および多数の後進者の育成、啓発に努力した、同会が今日あるのは全く二人の賜物といっても過言ではない。

鈴木敏雄（一九六四）郷土史家、津市湊見に生まれ、県立師範学校卒業後、県立津高等女学校へ奉職した。若い頃から県下を隈なく踏査して、各地の社寺を巡り、考古学をはじめ仏教美術を研究

し、文化財の発見、顕彰に努めた。昭和二十二年みずから提唱して大西源一などと三重郷土会を創立、月々臨地見学を計画実施、雑誌を発行した。志摩郡方面はこれまで郷土史の研究があまり普及していなかったもので、その方面に着手すべく、津高女を去って志摩町越賀中学校へ転任、同志を集めて志摩郷土会を始め、臨地見学とともに会誌を発刊し、文化財の発見、顕彰、後輩の指導育成に最善を尽した。長年にわたる採集品も多く、日記記録の集大成をし、その一部は刊行された。

伊東富太郎（一八六六～一九五八）郷土史家、桑名郡多度町香取に生まれ、金工に精しく、昭和二十六年以来三重県文化財専門委員として文化財の保護、顕彰に努めた。このほか文化財の発見、顕彰、保護に専念された人々には、名賀郡青山町大村神社宮司秋永康年、上野市の三重県文化財専門委員村地円次郎等があった。

平子鐸嶺（一八七七～一九一一）美術史家、明治十年津市に生まれ、明治二十六年（一九〇三）東京美術学校日本画科に入り同科を終えた後、洋画をも卒業した。彼は絵はあまり描かなかったが、仏教美術史を深く研究し、次々に重要な論文を仏教、新仏教、歴史地理、史学雑誌、国華、建築雑誌、史学界、考古界、学燈などに発表した。友人には黒板勝美、妻木笠浦、古谷春峰、高嶋米峰、島地大等、新海竹太郎、中川忠順、関野貞等があり、明治三十六年（一九〇三）東京博物館および内務省嘱託となった。明治三十五年（一九〇二）二十五歳の時新仏教に發表した「大和法隆寺再建説につきての疑」は法隆寺非再建に関する彼の最初の論文であった。法隆寺再建非再建論は明治三十七年ごろ、平子鐸嶺、関野貞の非再建論と

喜田貞吉の再建論が対立し大論争が繰り返された。そのうち鐸嶺は天智九年法隆寺火災の記事は、日本書紀の編者が推古十八年火災の事を間違えて書いたのだ、つまり千支を六十年誤ったのだということや、その建築様式が飛鳥時代特有のものであることを強調し、関野貞は法隆寺は高麗尺を用いて建てたもので、大化改新以前のものと断じた。喜田貞吉はその師小杉樞郎の説である天智九年法隆寺炎焼説を主張して譲らなかった。この頃は非再建説に利があったようである。

松浦武二郎（一八一八～一八八七）探検家、文政元年一志郡三雲村小野江に生まれ、弘化二年（一八四五）北地探検を志して蝦夷に渡り、蝦夷および樺太探検をすること数回、北地開拓の必要性をしばしば幕府に献策した。維新後は北地開拓の要職を歴任し、北海道名付けの親となった。北海道国郡図、蝦夷志、千島一覽図、近世蝦夷人物誌、唐太日誌、北蝦夷餘志、石狩日記等北海道、樺太の探検および地理に関する多数の著作があり、書画、篆刻等にも功みであった。

### 四 学者・文学者等

佐佐木信綱（一八七二～一九七〇）文学者、明治五年弘綱の子として鈴鹿市石薬師に生まれた。明治二十一年（一八八八）東京帝国大学古典部卒業後歌道の弘布に努め、竹柏会を設け、雑誌「心の花」を創刊した。明治三十八年（一九〇五）東京帝国大学文科大学講師、明治四十四年（一九一〇）文学博士となる。大正六年（一九一七）御歌所寄人を命ぜられ、昭和十二年（一九三七）文化勲章を受けた。





佐佐木 信綱

彼は常に歌人らしい清新な直感を失うことなく、歌学者らしい精細な研究を続け、校本万葉集、評釈万葉集、万葉集事典、新訂新訓万葉集等、万葉集に関する多数の著作を残し、また国学者として「日本和歌史」、「和歌史の研究」等

を著した。  
佐佐木弘綱（一八二八～一八九一） 文学者、鈴鹿市石薬師の人、信綱の父であり、伊勢市の足代弘訓について和漢の学を修め、藤堂侯に国書を請じ、松阪で鈴屋社中の監督としての和歌を指導した。明治十五年（一八八二）東京帝国大学に古典科を創設、小中村清矩博士と親しく、大学の講師となった。著書多く、書も見事であった。

沢潟久孝（一八九〇～一九六八） 文学者、伊勢市宇治の生まれで京大英文科を卒業後、京大教授となり、訓詁、註釈を主とする緻密な万葉集研究学者で、その著に「万葉の作品と時代」、「万葉古径」、「万葉集新釈」などがある。

井上頼文（一八四三～一九三一） 文学者、伊勢市宮後町に生まれ、漢籍、皇典、医術を修め、国学、歌学の造詣深く、明治、大正を通じて日本的な国学者である。宮内省御系譜課長、文学博士で、校注古事記読本、職原抄講義、徒然草講義、竹取物語講義、万葉山常百首講義、注釈山上憶良歌集などを著す。

鳥羽に国立の商船分業を置き、東京の攻玉舎商船分業卒業生を教師として航海術を教えた。これは現在の鳥羽商船学校の前身である。

柳瀬悦（一八三二～一八九一） 学者、津市に生まれ、数学、測量、航海術を学び、伊勢湾の測量、海軍観象台の設置に尽力し、海軍少将、水路部長となる。明治初年の水路、航海の功労者であり、また水産業にも貢献した。

斎藤緑雨（一八六七～一九〇四） 小説家、鈴鹿市神戸藩士家に生まれ、東京に出て仮名垣魯文の門に入り、諷刺と皮肉味を帯びた文章に長じ、曙新聞、朝日、読売、万朝報、二六新聞等に筆をとった。死ぬ前にみづから死亡の公告を発表したので有名である。油地獄、あられ酒、あま蛙などの作がある。

土井淡山（一八四七～一九一八） 学者、光華といひ北辰新聞社、東海新聞社などを経営し、明治十九年（一八八六）以降、飯高、飯野、多気郡長、後醍醐院議員となる。詩文をよくし、英国文明史、孟子七篇、欧米大家見聞録、淡山遺稿等の著がある。

松本宗一（一八四二～一八八九） 学者、地方新聞のはじめ伊勢新聞の設立者として本県文化の向上に裨益した。

佐々木狂介（一八五〇～一九〇九） 教育者、津市部田光蓮寺住職で土井馨牙の門に入り、後三重県立師範学校に奉職、かたわら尚友義塾を開く。本願寺文学寮、天学林教授となり、各地を巡錫した。釈門文章軌範、仏書、詩文稿等を著す。

常盤井堯棋（一八四四～一九一九） 書家、有栖川宮熾仁親王の第二子、専修寺二十一世の法主である。管長職のかたわら書画、和歌をよくし、墨山と号する。

木田垣蓮月尼（一七九一～一八七五） 歌人、上野藤堂家老の息女で歌人である。夫に別れてから尼となり蓮月といひ知恩院に住した。陶器を作り自詠の歌を付けた。俳句をよくし、武道に長じ、遺稿に「海女蒔藻」がある。

鈴木小舟（一八五七～一九二九） 歌人、三重郡菟野に生まれ、国学、和歌に長じ、明治三十五年（一九〇二）御歌所御用、皇后宮職雇として、歌道を宮家をはじめ上流子女に教えた。

高島式部（一七八四～一八八一） 歌人、松阪市の医者石井道玄の娘、京都の高島清音に嫁した。和歌を香川景樹、千種有功に学ぶ。明治十一年（一八七八）天皇京都巡幸の際、九十四歳で古今集四百首を方寸の筆筒に彫刻して献じた。

和歌に長じ、「麦之舎集」「かたみの蔵」「蓮月式部二女歌集」を著した。

梅田春海（一八三三～一九〇三） 学者、員弁郡白瀬の人で儒仏国典に通じ田琳寺住職となった。京都で学び、後郷里に赤心学校を起し、子弟の教育に努めた。護法階梯、駁平田篤胤、神敵二宗論、猪名部神社考を著す。子香樟も経史、仏学に通じ、赤心学校を経営した。

近藤真琴（一八三一～一八八六） 教育者、江戸の鳥羽藩邸に生まれ、海外事情を知るため蘭学を高橋譲庵、大村益次郎の塾に学ぶ。文久二年（一八六二）藩命により幕府の海軍操練所に遣い航海術を習得した。明治三年（一八七〇）海軍操練所出仕、海軍中佐、一等教官となり、海軍操練所内に攻玉塾を開いて生徒を教えた。明治十二年（一八七九）東京芝に攻玉舎を新設し、明治十四年（一八八一）

御巫清直（一八一二～一八九四） 学者、伊勢市の御師の出で本居春庭、足代弘訓に和歌、古典を学び、神宮の御巫内人となった。

藤堂藩、神宮皇学館に古典を講じた。神宮神事考証、大神宮本記帰正鈔、伊勢神名帳考証などを著す。

生川正香（一八〇四～一八九〇） 学者、津市岩田町に生まれ、徳川春樹に俳諧を、樋口喜樹、足代弘訓に和歌を、松阪の小島新蔵に写真術を学び、國語に長じた。その著に八衢範の響、開花文章論、皇國語自在言葉二通、和蘭活字考などがある。

大林省軒（一八二四～一八八六） 学者、松阪市紀州藩士家に生まれ、松阪学問所教官となり、後筆東学舎を開く。世古延世と親しく、足代弘訓に皇典を学び、書画の鑑定に長じた。

斎藤誠斎（一八六四～一九一八） 教育者、津市に斎藤拙堂の孫として生まれる。漢学者で、二松学舎講師となり、帰郷後津高等女学校、励精館に漢文を講じた。

横光利一（一八九八～一九四七） 小説家、東京に生まれ、母が阿山郡伊賀町柘植の出身であるので三重県との関係が極めて深い。明治四十三年（一九一〇）県立上野中学校に入り、大正五年（一九一六）早稲田大学へ入学、大正六年の頃から文章世界へ「神馬」「野人」「村の活動」などを投稿した。「蠅」「日輪」により大正十二年文壇へ登場し、新感覚派運動を経て、昭和五年（一九三〇）「鳥」「機械」等には心理主義の屈折が見られたが、晩年の「旅愁」戦後の「夜の靴」を残して忽然として逝った。

江戸川乱歩（一八九四～一九六五） 小説家、名張市に生まれ、本名を平井太郎という。大正元年早稲田大学政経科に入学、探偵小

説に心酔し、大正四年探偵小説処女作「火繩銃」を作る。大正十二年筆名を藍峯より乱歩に変える。昭和四年長編の傑作「孤島の鬼」

「蜘蛛男」「黄金仮面」「白髮鬼」「恐怖王」等が続く。昭和十一年は

「少年探偵団」「新宝島」など少年物中心時代であった。昭和十八年日本推理作家協会初代理事長となり、正五位勲三等瑞宝章を受けた。

中山義男（一九〇〇～一九六七）小説家、福島県生まれ、大正十一年横光利一等と雑誌「塔」を発刊、大正十二年県立津中学校英語教師となり、昭和十三年「厚物咲」で第七回芥川賞を受けた。

田村泰次郎（一九一一～）小説家、四日市市に生まれ早稲田大学仏文科卒業、第二次大戦後「肉体の門」を発表一躍肉体文学作家として評判をよんだ。その他「男鹿」「蟪」では戦時体験と幻想を合わせた浪漫的作風に変わり新境地を示した。

伊良子清白（一八七七～一九四六）鳥取県生まれの詩人、明治二十八年京都府立医学校入学、詩作を好み、雑誌「文庫」に発表した。昭和四年詩集孔雀船を出版、彼は、大正十一年以来鳥羽市小浜に住んだ。彼の詩には幻想的、唯美的、神秘的な芸術至上主義の傾向が見られる。

池山青穂（一九六二）歌人、大阪の人、大正三年「国民文学」創刊以来五十年作歌を続けた。

河崎五十 伊勢市の人、大正七年ごろから神宮皇学館生徒を対象に「五更会」を作り短歌の指導をし、伊勢歌壇の中心になった。昭和二十五年「やどりぎ」を創刊、多くの歌人を育てた。

磯部桃果 歌人、伊勢市の人、日本画家百麟の子で昭和六年ごろ楽水居歌会を作り、同志の中には河崎五十、前田杜声、岩本楓溪等

があった。

嶋田青峰（一八八二～一九四四）俳人、志摩町大台町の矢に生まれ賢平という。明治三十六年早稲田大学卒業、大正二年より八年間「ホトトギス」の編輯をする。昭和十一年土上創刊十五周年俳句会を開き、新興俳句運動に活躍、強力リアリズム運動を推進した。

嶋田の浦（一八九三～一九五〇）俳人、的矢に生まれ、譲とい

い、青峰の弟で、兄を助けて「土上」を編輯した。  
長谷川素逝（一九〇七～一九四六）俳人、大阪生まれであるが本籍は津市、直次郎という。県立津中、三高を経て京大文学部に入る。高浜虚子に師事、ホトトギス同人、「阿漕」「まがたま」「桐の葉」を主宰、彼は日輪と土とをこよなく愛した。著作に「砲車」がある。

大町文衛（一八九八～）学者農学博士、遺伝学および昆虫学の研究者で、明治二十一年京都で生まれた。大正十年東大農学部農科卒業、三重大学教授、「コオロギ類における細胞遺伝学的研究」は有名である。

（三重県文化財専門委員）

人物を中心とした

# 文化郷土史

—滋賀県—

中 島 潔



滋賀県近江の国は、地理的にも歴史的にも「日本のへそ」に相当する位置を占めている。

まず、地理的には京阪神と中京の中間に位し、文化・交通・経済圏の結節点としての要衝をなし、また、歴史的には「王城の地」であった京都に対して近江の国は「覇者の地」といわれ、京を制するものは、その立地上・政治的・軍事的に、また、経済的にも穀倉地帯として必ず制しておくことの必要な地とされ、常に「王城の地」と補完関係を保ちながら日本の中心的位置を占めてきたといえよう。

天智天皇が都を大津に造営されたのをはじめ、天正四年織田信長が安土に城をかまえたのもうなづけるところである。

このように「王城の地」の前衛線として乱世の波にもまれた近江の国は、それだけにまた多くの歴史的・文化的偉人を生んできている。

いま郷土史を語るにあたり、本県の特長として避けることのできないものに「琵琶湖」と「近江商人」がある。

◎

その昔、近江盆地の陥没による断層湖として、また、我が国最大の淡水湖として知られる琵琶湖、古くは「淡海」と呼ばれ、これが「近江」の国名になったともいわれている。

近江の文明開化は、この琵琶湖の水に始まったとさえいわれ、遠くは乱世における戦火を水面にうつし、近くは明治前期の湖上運輸をささえ、中期にあっては京都を結ぶ疏水運河にと、歴史の流れとともにそれぞれの時代における貴重な役割を果たしてきた。

また、最近は水上勉著「湖笛」井上靖著「星と祭」などによって  
も広く紹介されているところである。

昭和二十五年我が国初の国定公園に指定され、琵琶湖八景とともに  
一躍観光の拠点となった母なる湖、琵琶湖も昭和四十六年「琵琶  
湖総合開発特別措置法」の施行により、自然環境の保全を基調とす  
る新しい時代の脚光と歩みに輝いている。

◎ 近江商人の始祖は、古く鎌倉・室町時代にすでに国内各地におい  
て活躍していたと史料は伝えている。

近江商法は、行商による経営とあわせ、全国各地に出店、店舗を  
設ける方法を取り、業種も至って広汎多岐にわたり、特にその合理  
的な経営方法を採用していたことなどが特色としてあげられよう。

また、経営の心構えにおいては、ひたむきな勤勉と儉約を信条と  
し、権力の庇護に依存することなく「自主独立の根性」をもって経  
営に精進していたこともあげられる。

かかる商法と、その経営信条があればこそ全国津々浦々に近江商  
人の名をひろめた所以であろう。

◎ 豪商番付の横綱といわれる伊藤忠兵衛（天保一三〇明治三六）は  
豊郷村に生まれ、少年時代は父の営む呉服の卸・小売を手伝い、十  
七歳にして早くも行商を心がけ、中国地方や北九州一円を幅広く歩  
いている。

独立心が旺盛で時代の流れを察知することだけ、三十歳の時商  
都大阪への進出を実現している。

議長として我が国民主国会の維持につとめたが、昭和三十九年七十  
五歳の生涯を閉じた。

## 郷土誌

明治五年官撰地誌「皇國地誌」の編集が命ぜられ、全国的に村  
誌、郡誌の編集がさかに行われはじめた。当時滋賀県の史誌編集  
事務兼学務を担当し、「明治新史」「近江地史」を著した北川舜治  
（天保二〇明治三五）は、栗太郡志津村に生まれた。

幼少より祖父に学問を授かり、わずか八歳で四書全部を暗誦した  
といわれるほどずばらしい頭脳の持ち主であった。後に京都で経  
史、博物学、医学、儒学等を学ぶ一方、詩文についても深く研究し  
た。帰郷後は、医業を営むかわら郷土史の研究に情熱を燃やし、  
「滋賀県沿革略記」「湖水漁業沿革誌」「茶臼山御陵考」等を著  
し、生がいを著作の仕事にささげたのである。

また、日本屈指の史学研究家として知られている中川泉三（明治  
二〇昭和一四）は、史学界では「条里博士」と呼ばれ、大化改新で  
行われた条里制の研究においては氏の右に出る者はなかったといわ  
れている。史誌編さん主任となって刊行した「近江坂田郡志」は、  
この種の郷土誌の編さんに先べんをつけたものとして学界では大い  
に賞賛されたものであった。資料の収集に当たっては、近隣県は無  
論のこと東京まで足をのばして滋賀県に關係のあるものを細大もら  
さず収集した。また、その資料を私蔵することなくすすんで学界に  
提供し、日本の史学の研究に大きく貢献したのである。

氏は坂田郡柏原村に生まれ、父に早く死別し、母の手一つで育て

大阪店の繁栄に伴い、京都にも店舗を設ける一方、明治十八年に  
は米國への雜貨輸出を、翌十九年には店員を英國・ドイツに派遣し  
て毛織物の直輸入を、さらに同二十九年には中国と綿・綿糸の貿易  
を手がけるなど海外貿易の創始的役割を果たしている。

事業の経営には、常に創意と信念をもつてのぞみ、当時政界・業  
界に先駆けて合議制・合議制・多数決制を採用して營業方針を決定  
するという方策をあみだしている点は特筆されるが、このように時  
流をぬく企圖性と勤勉力行が今日の伊藤忠・丸紅のいしづえを築い  
たのである。

◎ 西部開発の王ともいわれ、西武鉄道・西武百貨店の経営で知られ  
た堤康次郎（明治二二〇昭和三五）は八木莊村の出生である。

五歳にして父に死別、母に生別という悲運にありながら、後年業  
界に、あるいは政界で功なり得たのは、祖父清左衛門・祖母キリの  
愛情と薫陶もさることながら、逆境に耐える近江商魂の流れをくむ  
素地と根性を備えていたからであろう。

少年期にして、すでに経営者としての片りんをうかがわせるもの  
があったが、三十代に入ると、國家百年の大計にたった人生観をもつ  
て、未開地の開発を決意し軽井沢・箱根の土地開発、箱根遊覧船・  
駿豆鉄道の経営など關東西部開発の端緒をきり、後に「五島の東  
急」とならび「堤の西武」と呼ばれるまでになった。

三十六歳の春衆議院議員となり、戦後追放されるまで連続して議  
席を保ち党における重鎮的存在となった。

昭和二十八、二十九年と再度にわたる国会乱闘事件に際しては、

られた。小学校を卒業後農業に従事するかたわら苦学し、母校の代  
用教員として教べんをとるまでになった。坂田郡志の編さん主任と  
なって以来、県内各地の郡志、町志の編さんに従事し、昭和十二年  
彦根町志の執筆中脳溢血で倒れたが、責任感の強かった氏はその病  
床にあっても筆を執り続け、その責務を果たしたのである。

西川太治郎（天治元年〇昭和一七）は、東浅井郡びわ村に生ま  
れ、早稲田大学の前身東京専門学校政治経済科を卒業後、山梨日日  
新聞社、大阪朝日新聞社の記者として活躍した。後に近江新報社社  
長となる一方、県議會議員、衆議院議員等の要職に就き公共のため  
に尽くした。

氏は深く郷土を愛し、大津市長に在職中他の都市に比のない詳細  
かつ正確な志賀の都から明治四十四年までの市志編さん事業を遂行  
し、郷土をより広く深く理解する資料を住民に提供するとともに郷  
土愛の啓蒙に努めた。

また、氏が精力的にすすめた大津宮設立の運動は直ちに実現しな  
かったが、今日の近江神宮設立の基になったのである。

## 教育、思想

明治維新は、封建制度を打破し、欧米列強と比肩し得る近代國家  
を打ち立てる建設活動であった。この期における近江が生んだ勤王  
の志士として、西川吉輔（文化一三〇明治四〇）をあげることがで  
きるが、教育行政のれい明期において先覚者的役割を果たした松田  
道之（天保一〇〇明治一五）も特筆すべき人物の一人である。

氏は、鳥取藩の出身で広瀬淡窓に学び、維新後京都府大参事を経

て、明治四年三十一歳の若さで大津県令(のち滋賀県令)になった。

明治五年の学制頒布に先だって明治四年に長浜の浅見又蔵が、私財を出して設立した学校に対し、自ら「滋賀県第一小学校」と命名した。学事奨励書の公布後明治六年二月には「立校方針概略」を県下に配布し、新学制による学校設立を勧奨すると共に、「小さな学区にあっては単独では創立できないので、幾つかの学区が連合して学校を設立せよ」と指導している。また、ドイツ人を招いて「欧学校」を設立し、波鶴子夫人をはじめ五十余名に学ばせたり、「土下座禁止令」を出すなど民主的な県令ぶりを発揮した。

丁度その頃、十六歳で膳所藩の貢進生として開成学校に学んでいた杉浦重剛(安政二〜大正一三)は、明治・大正・昭和の時代を通じて、国家有為の人材を各方面に送り、吉田松陰と並び史上にみる大教育家であった。氏は、父重文・母八重・恩師高橋担堂・岩垣月州・黒田きくろ・ロスマー・ショーレルマン両博士や、松陰・中江藤樹・勝海舟・高島嘉右衛門等からの教え、感化、影響などをとり入れ、人格全体の多面的、調和的発展をはかり、明治の精神を身につけた格調の高い日本人らしい日本人であった。



杉浦重剛氏は、日露の戦勝に酔い、舶来至上主義におぼれるのを嘆いて、日本古来の良さを再認識する教育方針を押し進めていった。晩年(大正三年)東



時に「精神薄弱児」というものは共同体の病いである。だからこれを救うのは構成員である我々個人の責任であり、その責任を全うすることが個を全することであると確信していた(財団法人 大木

会名誉会長 十河信二)人であり、日本の文明を質的に高めた偉大な先駆者、糸賀一雄(大正三〜昭和四三)も滋賀県の誇りである。

氏は、京都大学のインド哲学科を卒業後一か年間京都府下の小学校代用教員を勤めた。本県の秘書課長・経済統制課長・食糧課長を経て終戦を迎えた。県職員を辞し教員時代の友人、池田太郎・田村一二両氏と共に近江学園の創立に尽粋し、自ら園長として全身全霊を精薄児教育にささげ、「知恵の遅れた子どもの父」と呼ばれるようになった。氏の手がけた施設は、近江学園(昭和二一)・一麦寮(昭和三六)・落穂寮(昭和二五)あざみ寮(昭和二八)など数多く、全国の精薄者教育界で「糸賀」の名を知らない人はなかった。昭和四十三年九月、児童福祉施設職員研修会での講演中「この子らに世の光を、ではなくて、この子らを世の光に……」といいながら倒れ、翌日不帰の客となった。福祉施設の現状をみると、氏の心は生きてひろがっているといえることができる。

教育投資ほど困難な仕事はない。この道に生涯を捧げた先人として、大正八年に、淡海女子実務学校を創立し、女子教育の恩人と

宮学問所及び良子女王殿下御学問所に出仕して倫理を御進講した。氏の業績は、次の追悼誌の一端から伺い知ることができる。

「一度訃報が発表せらるゝや、聖上・摂政・妃の御使の侍従・久邇宮からの再三の御慰問御敬弔があったのは言うまでもなく、東郷元師・清浦首相……。あれだけの天下の諸名士を網羅した葬儀は、近來まれに見る盛儀であったに徴しても、生前の遺徳が如何に各方面に影響しているかがうかがわれた」。

大正の初めから昭和にかけて我が国初等教育界の恩人で、「秋田の国語か・国語の秋田か」とまで言われた秋田喜三郎(明治二〇〜昭和二一)がいる。

氏は、滋賀師範学校卒業後、同附属小・奈良女高師附属小に奉職し、日々の教育実践に基づいて、創作的読方教授(大正八)や、発展的読方の学習(大正一四)を著し、その新鮮さは、当時の国語教育人の魂をゆさぶったものである。

昭和十年神戸市視学に迎えられ教育行政に携わったが、この仕事は氏の性格に適せず、七か月で職を辞し専ら書斎での研究の傍ら全国的に講習会教師としての教壇行脚をした。

昭和十六年文部省に抜てきされ、国語教科書編さんの大事業に身を捧げた。昭和二十年五月職を辞し帰郷したが、過労のため病を得て翌年五十九歳をもって歿した。

「……著述が唯一の楽しみで……」という子息喜男氏のことばから、氏の学究的な性格を知ることができる。

終戦直後「普通の子どもでさえ満足な教育が受けられない時代に、精薄児の教育などに金が使えぬか」と公言する者もいたという

いわれる塚本さと(天保一四〜昭和三)や、近江兄弟社を設立して、キリスト教の教化事業を湖畔の地に植えた吉田悦蔵(明治二三〜昭和一七)がいる。また、全盲の身をもって私立訓盲院を設立(明治四一)し、昭和三年県管移管に際し一切を県に提供した盲教育の先覚者山本清一郎(明治一二〜昭和三六)がいる。

戦後、参議院議員となり、世界の平和を念願し、世界連邦達成を説いた西田天香(明治五〜昭和四三)は、異色ある思想家である。

氏は、三十二歳のとき、過去の一切を捨て單身無一物の路頭率仕にたち全国を行脚。「無理はすまい」「許されて生きよう」「できるだけ働いて儲けまい」などを信条として、「一灯園」を創立。托鉢行脚と便所掃除の奉仕で全国の信者に尊敬された。著書に「懺悔の生活」「無心」「池涌の生活」がある。

#### 科学、技術者

明治期における湖上交通の近代化の先駆者として、一庭啓二(弘化元年〜明治四四)をあげることができる。慶応三年大聖時藩士石川璋一と共に、長崎でオランダ人ボーゲルに造船術を学び、帰郷後、蒸汽船「一番丸」を建造した。(明治元年)つづいて「二番丸」を建造(明治三年)、湖上交通の面目を一新、新生命を与え、今日の琵琶湖上交通・観光の繁栄の基をつくった。

農業、水産国であった日本にとって、その発展上での恩人、発明家山岡孫吉(明治一四〜昭和三七)がいる。ドイツのディーゼル博士は、いわゆるディーゼル・エンジンを発明したが、そのエンジンを世界に向けて、ヤンマーエンジン(山ヤンマー)とし大衆の用

に供し得るようにしたのが山岡氏である。

ドイツ発明協会が、かつて国外には出さなかったディーゼル金メダルの授賞式当日、メダルの伝達者ドイツ大使ハンス・クロル博士のあいさつから、氏の業績を偲ぶことができる。

「敬愛する山岡氏よ!! ……このメダルは、ドイツ発明協会と、ドイツの産業及び技術関係一般が、小型ディーゼル・モーターの発明と改良という、あなたの一生のお仕事に対して、大いなる尊敬の念と……。あなたは、日本の経済と日本の技術とに大いなる富を与えられました。ことに数百万日本農民、中小企業者に対して、労働方法の合理化による労働の収益の増大をもたらされ、これによって彼等により大きな人間的幸福を味わしめるという可能性を与えられました。……。ドイツの発明家ディーゼルと、日本の発明家ヤマオカとは、精神的に手を握り合い、その高貴な社会的精神によって、人類の福祉に貢献するところの、共同の事業を達成されたのであります」。

澄みきった湖国の空が生んだ天文学者として、太陽黒点活動・黄道光・彗星等の研究と花山天文台長で名をはせた山本一清（明治二二―昭和三四）や、大熊星座のS星が変光することを発見し、世界の天文学界に名を現した中村要（明治三七―昭和七）。山本一清の弟子で「木辺のレンズ」で知られる木辺亘慈（現滋賀県教育委員会委員長）がいる。

一方、生物学界では「鳥類啼声の研究」動物体の生理学的進化」「日本淡水生物」等の労作を著し、後に、京大名誉教授になった川村多實二（明治一六―昭和三九）や、水産の川端重五郎・植物の橋

## 芸術

本忠太郎がいる。

近代日本絵画史に輝く、山元春挙（明治四〇―昭和八）は、大津市膳所に生まれた。十三歳で野村文挙について日本画を学び、十四歳の時、京都青年絵画研究会に出品、一等を受け、後、森寛斎の門に入り、技法を練り、信念を培ったことが偉大な足跡を残すものとなった。

竹内栖鳳、菊池芳文らと共に、青年画家懇親会を起こし、画界の興隆を図るとともに、多数の門下生を養成し、京都市立美術工芸学校、絵画専門学校の教授として、後進の育成に努め、福田平八郎、徳岡神泉、山口華揚らの日本画家を輩出させている。

また、春挙画伯の画は、国内だけでなく、シカゴ、セントルイス、パリの万国博覧会にそれぞれ出品し、海外に邦画の声価を高めた、後、画を寄贈したことにより、フランス政府より勲章を贈られたことは、当時の画壇にとっては、特筆されることであった。



春挙画伯の画は、円山派の画風を受け、風景画、とくに気骨ある山岳画家の風があった。竹、石、瓢を愛好し、狂歌に堪能で、築庭にも造詣深く、湖畔に遺した「藍花浅水荘」は、名園として

知られている。また近くにある遠州七霊の一つ、膳所焼の廃絶を惜しんで、復興のために援助するなど、郷土の発展にも力をそそいだ。

一方、洋画家の野口謙蔵（明治三四―昭和一九）は、櫻川村に生まれ、その風景、郷土を愛し、郷土の風物の特異な色彩で描き、歌にもうたった偉大な芸術家であった。帝展に出品して特選となった「霜の朝」は、謙蔵の油絵具で描かれた新しい日本画といわれた。洋画と日本画の両方の画風を学び、近江風景画に多くの傑作を生み、将来を嘱目されながら、昭和十九年、四十四歳の若さで逝去した。なお、野口と歌人の米田雄郎との二十数年の交遊は、互に芸術上の感化を与え、磨きあっていた。

現在、活躍中の画家で、日本画の小倉遊亀（明治二八―）は大津市の出身、そのやわらかい筆の人物画は、女流画家の代表である。美術史学者の野間清六（明治三五―昭和四一）は、近江八幡市の出身で美術史、美術評論等に多くの著書がある。

美術を語る時、忘れられない人にフェノロサ（一八五三―一九〇八）がある。明治十一年、東大教授として招かれたフェノロサは、日本古美術の紹介に努め、三井寺法明院を訪れ、受戒し、法号まで受けた、後、ロンドンで客死したが、遺言によって、三井寺法明院に葬られている。

芸能面で活躍した沢田正二郎は、三井寺の寺侍の家に生まれた。大衆のための中間演劇である新国劇を樹立した点で、彼の功績は大きい、しかし、残念なことに、昭和四年、赤穂浪士を上演中、三十八歳の若さで歿したが、その魂は、辰巳、島田に受け継がれた。

淡海節の志賀廼家淡海（明治一六―昭和三一）は、堅田町の出身である。その独特の芸、味わいで一世を風靡した淡海は、一座を組織し、勧善懲悪の思想を盛った自作自演は大衆に非常な人気を博した。芸に生きた淡海の最後は、大見得きって幕の閉まった時、立っただけで往生したといわれている。

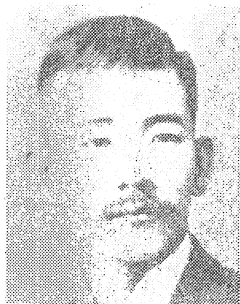
近江にはスターはいないといわれるが「暖流」や「偽われる盛装」などの名作をとり、女をとらせては右に出るものなし、といわれる映画監督の吉村公三郎は、湖北山東町の出身である。

プロ野球に生き、プロ野球に死んだといわれるパ・リーグ会長、中沢不二雄（明治二五―昭和四〇）は、野球評論家としても有名なある。

また、日本の六古窯といわれるものの一つに、信楽の窯がある。奈良時代に、一時、紫香楽に宮のおかれた時もあるが、この陶器が大きくクローズアップするのは、鎌倉時代に入ってからである。古くは、壺が主であったが、この時代頃から茶陶としての発展を遂げている。

古信楽というのは、茶道文化を母体としたものであるが、茶人等にもはやされるのは、技巧に走らず、自然の地肌で釉薬をかけずに窯の変化による味が尊ばれたもので、その古信楽の手法を伝承するという点で、県の無形文化財の指定をうけている高橋楽斎（明治三一―）、上田直方（明治三一―）は、それぞれ伝統のうえに、各人の作風をもって、堂々とした新作品をつくっている。





文 芸

波 小 「おとぎ話のおじさん」  
谷 小 「小波のおじさん」と、  
子ども達から親しまれた  
巖谷小波（明治三〇昭和  
八）は、日本の童話の開  
拓者である。

小波は、水口藩の医家であり、官吏であり、書家であった巖谷一六の三男として生まれ、父は小波に医師をつがせようとし、ドイツ語を勉強させたが、大学医学部の入試には、故意に二度も落第し、家人の反対にもかかわらず文学に傾倒していった。

津山人の雅号で新聞に投稿（一七歳）硯友社の同人となり、尾崎紅葉らと知りあい、小波の大学志望の方向は決定づけられていった。小波の小説として、はじめ評判になったのは「五月鯉」で、続いて「妹背貝」「友禅染」「秋の蝶」などの作品を出したが、一作ごとに大人向きから子ども向きへと進み「こがね丸」というヒット作が、明治二十四年に発表された。この頃は、子ども達の読みものはほとんど無い時代で、小波は童話の開拓者ということが出来る。明治四十年雑誌「少年世界」に「ひつじ太鼓」をのせた頃は、日本童話の第一人者であった。小波の童話は、子どもの心を傷つけたり、暗い方向に向けないで、めでたし、めでたしで終わっているのが特長である。

小波が、医学に進まされた頃、父の親友、川田剛の家にあずけら

有力候補となり、これが契機となって、作品を発表する機会に恵まれ、作家としての地位をかためていった。しかし、何といっても、「草筏」「花筏」「筏」の「筏」三部作は彼のライフワークといえるものである。これは徳川末期から大正にかけての外村家の家系の流れをえぐり出したもので、完成に実に二十三年間を費している。戦後、とく子夫人が死亡し、金子てい（初代文部省婦人教育課長）と再婚したが、その再婚を機に性生活を描いた「濡標」また、晩年夫婦ともに癌を病み、夫妻が互にいたわりあって、無常感に身を任せている心境を描いた「落日の光景」は私小説の極点をきわめた傑作といわれている。

日野町出身で、幼ない頃は水口町に住み、東大応用化学出身の技師として、農商務省研究所に勤めている官吏であって、探偵小説を書いた甲賀三郎（明治二六〇昭和二〇）がいる。彼は「琥珀のパイプ」等論理的な短篇で、探偵小説界では本格派の代表格と目されていた。

敗戦による虚脱、不安もようやくおさまる復興のきざしがみえはじめ、県内の文化活動の気運が醸成されて来た時、五個荘町出身で、長浜に勤務していた辻亮一（大正元年〜）が、満洲での抑留記ともいふべき「異邦人」で、昭和二十五年上半期の第二十三回芥川賞を受賞したことは、湖国の文学界に光明とほげましを与えた。辻の受賞が契機となって、県内の文学界が一つのまとまりをもち、昭和二十六年、滋賀文学会が生まれ、第一回文芸コンクールの作品募集を行ったことは、県内に大きな反響をよんだ。

この文学会の設立に発起人として活躍したなかに、作品「芽」で

れた。その三女に綾子というのがあり、川田家の女中が、思い間違っ、小波に「あなたは綾子さまの許嫁なんでしょう」といったことが、大きな暗示となり、小波の初恋となったが、後に川田綾子は別人と結婚した。これらのことが、尾崎紅葉書くところの「金色夜叉」の主人公、間貫一のモデルは巖谷小波であるという、うわさとして広まっていたのである。

晩年の小波は、「おとぎ話のおじさん」「小波さんのおとぎばなし」といわれ、全国はもちろん、遠く、朝鮮、台湾、中国等までも口演旅行に出、その途中で倒れて、一生を閉じた。

五個荘町は江州商人の発祥地であるが、外村繁（明治三六〇昭和三八）の生まれた外村家を代々富裕な江州商人の家であった。東京、日本橋で呉服木綿問屋を営んでいたが、慣習に従って、幼少時代は郷里で牧歌的生活を送った。

膳所中、三高、東大経済学部に進んだが、文学熱は強く、同人雑誌「青空」を創刊していた。初恋の女中に境遇の似ていた近くのカフェにいた女に一目ぼれして同棲、これがとく子夫人である。家業の方にも一時、努力したが功あがらず、弟にゆずって、阿佐谷に引っ込んだ。



外 村 繁

芥川賞の創設第一回に、「草筏」が未完であったにもかかわらず、石川達三、高見順と並んで

読売文学賞を受賞した竹生島出身の峰専治（明治三一〇昭和三〇）がある、峰は、県の第一回文芸コンクール創作の部に、外村繁、辻亮一らと共に選者として、また県内文学志望者の指導者として尽力した。

外村繁に続く作家が、しばらく切れていたようであったが、大津市出身の花登篁（昭和三〇）が出た。大津商業卒業後、大津で人間座を結成して新劇運動に入ったが、彼は、いまや、テレビ、ラジオ、ドラマの人気作家となっている。「堂島」「船場」「ぼてじゃこ物語」「あまくちからくち」「細うで繁昌記」「どてらい奴」等々一連の作品は、主に関西を土台とした上方人気質、根性もので、人生のさびを描いて非常に好評であり、週刊誌への連載、テレビの脚本、芝居の演出等、そのエネルギーな多作ぶりは有名である。旧制第三高等学校の寮歌「紅燃ゆる丘の花」は、一高、北大予科の寮歌などとともに、高等学校寮歌の代表として、多くの人に歌われ、親しまれているが、その作詞者は、知る人ぞ知る、彦根市出身の沢村胡夷（明治一七〇昭和五）である。

沢村の詩人としての活動はおもに青年時代で、その詩情は注目されていたが、彼の専攻は美術史であり、美学の講義や、京大助教であった大正の末には、中国、欧米にも留学しているので、著作には詩集の外に美術研究史関係がある。

また、安土町の出身で、本県に詩人学校をつくって、若い人たちの指導育成に努めた井上多喜三郎（明治三五〇昭和四一）は県の文学会設立に、また選者としても親しまれてきたが、昭和四十一年、交通事故で不慮の死をとげた。

現在、活躍中の詩人に北川冬彦（明治三三）がいる。大津市で生まれたが、父の満洲赴任（満鉄）に伴ない、小・中学時代を満洲各地で送っている。東大卒業後、映画評論でも活躍したが「面」「ルブラン」「犀」などの雑誌を出して、短詩、新散文詩運動を推進し、昭和初頭の詩形式変革の主導者の一人となり、プロレタリア詩の運動における一つの新しいタイプを示した。現在、詩誌「時間」を主宰している。

終戦の年の一月、ビルマで戦歿した高祖保は彦根市出身の新作風の詩人であった。

最近活躍している辻井喬（西武社長堤清二）は、室生犀星賞を受けた詩集「異邦人」の外「不確かな朝」や長篇小説「彷徨の季節の中で」を刊行し、実業人としての外、文芸人としてのもう一つの面をあらわしている。

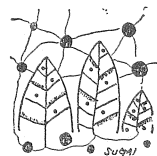
音羽ゆりかご会の歌手、山田孝子によって、全国に普及したメロディーで有名な「あの子はだあれ」「チンカラ峠」の作詞者、童謡詩人で知られている細川雄太郎は日野町の出身である。

歌人、米田雄郎（明治二四～昭和三四）は櫻川村、極興寺の住職で、若くして歌道に志し、前田夕暮の門に入り、後「好日」を主宰して、後進の指導育成に尽くし、多くの新人を輩出している。とくに、滋賀文学会の設立に参画し、推されて初代文学会長となった。氏の歌は、おおらかな人間性をふまえた素朴、純情の歌で、長命寺山麓と比叡山に歌碑がある。

また、現在、昭和女子大教授で、歌人の木俣修（明治三九）も滋賀県に生まれた。少年時代「赤い鳥」に詩を投じて、北原白秋に

知られ、後、上京して歌誌「香蘭」に加わった。氏の歌は、その多くの歌集にもみられるように、歌柄ふとく、男性的な詠み口が特色であるといわれている。また、近代短歌史の研究者としても多くの業績がある。

（滋賀県教育委員会社会教育課参事）

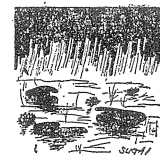


人物を中心とした

## 文化郷土史

— 京 都 府 —

藤 田 二 朗



昔ふうにいえば、京都府は山城と丹波の大部分、丹後の国とからなる。北は日本海で、古代史でいえば丹波、丹後は出雲系、山城は大和文化系に分けられよう。しかし大和朝廷の力が強くなり、ことに平安京ができて近隣の地域は平安京の直接の影響下におかれたから、地方的な独自の文化圏を形成することがなかった。また近世に入ってから有力な大名が配置されることはなかったから、文化史的には京都府＝京都である。

平安京以来近世に至るまで、わが国で都市といえるのは京都だけであったが、江戸、大坂の成長によって元禄期あたりを境にその相対的地位は低下しはじめる。今日のことはでいえば「地盤沈下」である。しかし築かれた歴史と、蓄積された富、教養は急に失われるものではない。皇室、社寺という精神的支柱をよりどころにして、伝統的な文化圏を形成しつつ明治維新を迎えるのである。

## 教 育

京都の近代化への努力は王政復古の号令とともに始まる。しかもその努力はまず教育制度の整備にむけられた。明治二年五月、上京第二七番組小学校が開校する。明治五年の学制に先だつわが国最初の小学校である。同三年には中学校、同五年女子教育機関として新英学校と女紅場、そして集書院（図書館）。つづいて師範学校、医学校、農学校、画学校、盲啞院が開校した。

文明開化の先頭をきる勢いで新しい施策を進めたのは榎村正直

（はじめ権大参事、第二代知事となる）である。榎村は長州の出身、だからこそ思い切った策がとれたのであろうが、彼の急進的な指導は問題をおこすことも多かった。このとき彼に協力したのが山本寛馬（府顧問、のち府会議長）と明石博高の二人である。山本は会津藩士で時代の流れに先見の明をもっていた。新島襄の学校設立運動に力をかけたのも彼である。新島は山本の尽力によって明治八年同志社英学校を開校することができた。明石は市内の薬屋の生れ。理化学と医学関係でとくに功績が大きい。

高等教育機関としては、明治二年第三高等学校（後の三高）が大坂から移転、さらに同三〇年京都帝国大学の創設をみるに至る。開学にあたって初代総長木下広次は「すでに一大学とせば固有の生存をなすには独特の資性をそなえざるべからず」とのべたが、近代官僚の養成機関として出発した東大に対し自由な学風をかけた京大の歴史がはじまる。

戦後、日本で三人の物理学者がノーベル賞を受けたが、その三人はいずれも若き日を京都で送っている。湯川秀樹、朝永振一郎は京都府立一中―三高―京大、江崎玲於奈は同志社中―三高である。学問と京都。偶然だけで片付けられないような気もする。

## 日 本 画

京都画派という呼び方がある。一般的には江戸派、東京派に対する呼称であろうが、もっと限定して明治末年から大正、昭和初期に

かけて活躍した文（帝）展系の画家並びにその後継者たちを指すことが多い。

京都画派の源流は応挙に発する円山派、呉春から出た四条派であるが、いずれも写生を重んじ、旧来の狩野派、土佐派にあきたらない江戸後期の新興画派である。したがって明治初期の近代化への要請に通ずる素地をもっていた。

明治一五年、一七年と東京で開かれた絵画共进会に京都からは森寛斎、久保田米遷、幸野楳嶺、鈴木百年、岸竹堂らが登場し、「古い洗練された伝統をもつ京都画壇は、全国でも圧倒的にすぐれた多数の画家を擁し、大挙して東京に進出するの観があった」といわしめたのである。

これに先だつ明治一三年京都府画学校が設立された。京都在住の新旧画家の建議にもとづくもので、西洋画科をふくみ後継者の養成に当たるものであった。同校は後に京都市に移管されて市立美術工芸学校となり、さらに絵画専門学校（明治四二年）となって美術工芸界の人材を育てていく。

初期の画家のうち森寛斎、岸竹堂、幸野楳嶺は帝室技芸員に選ばれたが、ここでは楳嶺（弘化一年―明治二八年）を紹介することにしたい、というのは画業も名を残すものをもっているが、後進の育成に労を惜しまなかったことが彼の生涯をいっそう意義あるものとしているからである。楳嶺は府画学校設立の建議に主役を演じているが、謹厳な理想主義者であった彼の門から最も多く優秀が育



幸 野 煤 嶺

った。竹内栖鳳、菊池芳文、都路華香（明治三年～昭和六年）、谷口香嶠（元治一年～大正四年）の四天王。上村松園もこの門である。次の代には栖鳳門から西山翠嶂、土田麦僊、橋本関雪、西村五雲ら、芳文門からは養子の契月、香嶠門から猪飼嘯谷、華香門から富田溪仙、さらにこれらの人たちの門下を数えあげると明治中期以降の京都画壇の蔓茶羅をみる思いがする。なお後に東京に移った川合玉堂も煤嶺門下の出身である。

煤嶺としては当時フェノロサの説に接して感動し、新しい日本画の創造を後進に託する気持がいっそう強く働いたものと思われる。

明治三〇年を前にして寛斎、煤嶺、竹堂らが相次いで世を去ったとき、栖鳳をはじめとして煤嶺門の俊秀たち、その外では山元春挙、木谷桜谷らが京都画壇の第一線にたった。第一回文展は明治四〇年に開かれ、京都からの審査員は長老の今尾景年を除いて芳文、栖鳳、春挙と新鋭三人が選ばれた。

竹内栖鳳（元治一年～昭和一七年）は師の煤嶺と同じ京都生まれ。生家は料理屋。東の大観、西の栖鳳と並称された日本画壇の大御所であった。この二人はわずかの期間だが同時期に市立美術工芸学校の教壇に立っている。

きものであろう。春挙門では川村曼舟が知られる。師とちがって温雅な画風である。

煤嶺の死後栖鳳門下となった上村松園（明治八年～昭和二四年）はきつすいの京おんなで、女性最初の文化勲章受賞者。女性をえがいてこの人ならではのものをもつ。西山翠嶂（明治一二年～昭和三年）は栖鳳の娘むこ。京都最大の画塾をひきいて栖鳳亡き後の京都画壇の代表格であった。橋本関雪（明治一六年～昭和二〇）京都市民は彼の名をきいて作品とともに様を思い出す。というのは銀閣寺に近い疎水ぞいの桜並木は彼の夫人の寄贈によるもので、今も関雪桜とよばれる。西村五雲（明治一〇年～昭和一三年）は小品とデッサンに定評がある。

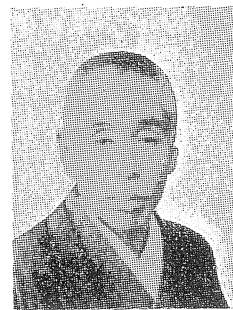
土田麦僊（明治二〇～昭和一一年）佐渡の生まれ。その作品「舞妓林泉」は記念切手にもなったからご存じの方も多いだろう。彼は、大正七年国画制作協会を設立して官展に反旗をひるがえす。行を共にしたものの小野竹喬、榊原紫峰、村上華岳、野長瀬晩花。そして一年後に入江波光が加わった。いずれも絵画専門の第一期生である。この会は昭和三年に終わりを告げるが、多くの名作がここから生まれた。京都画壇の歴史を飾る一時期である。

栖鳳門に多くをさいたが、有職故実にくわしく歴史画で知られた香嶠門からは猪谷嘯谷が、絵専校長もやった都路華香門からは富田溪仙が出る。溪仙（明治一二年～昭和一一年）は博多の生まれ。仙の字がふさわしい独自の境地をもつ画家であった。京都画壇として

栖鳳はあふれるような才気の持主であった。入塾後わずか半年余りで自己流の絵をかって師の激賞を受け、竹内流を公認されたことなど若いときから出色のものがあつた。何しろ当時は筆のかすれまで師の風をならうのが当たりまえの時代である。

しかし栖鳳を大成させたものはこの才気だけではない。時代の求めているもの——日本画はいかにあるべきか、について明確な自覚をもち、それを画業の上に積極的に示したことにある。いうなれば彼も近代日本の夜あけとともに生まれ育った時代の子であった。

菊池芳文（文久二年～大正七年）。栖鳳と並ぶ京都画派若手のトップで、師の煤嶺も芳文を



竹 内 栖 鳳

後継者と考えていたらしい。栖鳳が勢力を広げていくのをみながら、自己の分を守ってかわることがなかった。養嗣子の契月が後をつぎ、人物画に定評があつた。

山元春挙（明治四年～昭和八年）大津生まれで寛斎の門に入る。

二十歳で京都青年絵画共進会の審査員になり、また第一回文展で芳文、栖鳳とともに審査員に選ばれている。当時煤嶺門の勢力が強かった京都でこの地位を占めたことは、彼の実力のほどを裏書きするものである。画風に栖鳳の特色を柔だとすればむしろ剛ともいえる。

は数少ない院展系である。

ここで画壇の外にあった独立の巨峰富岡鉄斎（天保七年～大正一三年）にふれねばならない。鉄斎は京は三条の法衣商の生まれ。若き日に梅田雲浜ら当時の志士を知り、また太田垣蓮月尼との出会いが彼の一生に大きな影響を与えたという。彼は自分は画工ではなく、学者、儒者であると自ら任じていたから「わしの絵をみるならまず賛を読んで下され」といったという。また絵については「師承するところなし、ただ意にしたがってこれを作るのみ」と書いている。

画人との交際がなかったわけではないが、美術界の風潮とは全く関係なしに、七十歳、八十歳をこえてその画境を深めていった。鉄斎は海外での理解者も多い、彼は文人画の最後の巨峰であるとともに、京都が生んだ最も国際性豊かな画家であったといえよう。

前記の人たちと戦後との間には中村大三郎（明治三十一年～昭和二年）、石崎光瑤（明治一七年～昭和二年）、案本一洋、南画の水田竹園らがいるが、この辺から戦前、戦後を通じて活躍した人たちの時代になる。福田平八郎、小野竹喬、徳岡神泉、金島桂華、堂本印象、宇田荻郎、山口華楊ら、文化勲章、芸術院会員クラスがズラリと並ぶ。しかし、これらの人たちのうち現存作家は竹喬、荻郎、華楊となつたのはさびしい。国画会の旗あげに参加した竹喬（明治二二年生まれ）は今も健在で第一線に立っているけれども。

ところどころ付記したが、京都の画家は京都出身者ばかりではない

い。注記した人以外で古いところでは森寛斎は山口、岸竹堂は滋賀。ついで香嶠Ⅱ大阪、契月Ⅱ長野、関雪Ⅱ兵庫、華岳Ⅱ大阪、光瑤Ⅱ富山、竹園Ⅱ大阪、平八郎Ⅱ大分、竹喬Ⅱ岡山、桂華Ⅱ広島、荻郎Ⅱ三重の例にみられるように、京都生まれ以外の人の方がかえって有名になっているのじゃないかという人もあるくらいである。しかしそれもそのはずで、古い伝統に加えて、官展で東京ときつ抗し、院展を加えて日本画壇の三分の一を占めるといわれた京都画壇の地位がしからしめたといえよう。

## 洋画

応挙はすでに西洋画法を知っていたとされるが、洋画の先駆者としてはやはり田村宗立（弘化三年～大正七年）をあげねばならない。宗立は南画から仏画に転じ、写生画にひかれてさらに油彩を志す。全くの手さぐりで学びはじめた彼が横浜にワーゲマンをたずねたのは明治五年ごろといわれる。そこで宗立は高橋由一（重文・「蛙」の作者）らを知る。京都へ帰って制作のかたわら府立画学校で洋画を教え、後にのべる浅井忠の洋画研究所にも参加する。彼が油彩をはじめたころ、絵具や油は市販されておらず、その調製に「今から思えばくだらない骨折をした」と語っており、浅井忠は先覚者としての宗立を非常に尊敬していたという。

彼が育てた人は伊藤快彦をはじめかなりの数にのぼるが、全国的に名を知られた人は少ない。しかし、彼が画学校で教えた人が図画

教師として各地に散り、それに教えをうけた人から次代を背負う人材が生まれた。太田喜二郎や安井曾太郎らがそれである。また青木繁や坂本繁二郎が学んだ久留米の洋画家森三美も宗立の時代に京都で学んだ人である。

しかし京都の洋画が本格的な展開をみせるのは、それより少し



忠 後、浅井忠（安政三年～明治四〇年）を京都に迎えてからである。浅井は当時黒田清輝とともに東京美術学校の教授であったが、フランス留学から帰国すると新設の京都高等工芸学校図案

科の教授として着任した。初代校長中沢岩太のこん請によるもので、明治五年のことである。

京都に移って以後の浅井の作品には滞仏時代ほどのさえがみられないといわれるが、人材を育てた点で彼の最後を飾るにふさわしい京都在住期である。彼は明治三六年中沢らの協力を得て聖護院洋画研究所、その発展として関西美術院を設けた。この時期にこを輩出した人に、梅原龍三郎、安井曾太郎、黒田重太郎、津田青楓ら、また浅井を助けた人に鹿子木孟郎がある。

鹿子木は岡山の生まれ、外遊中にパリで浅井の知遇を得たことで京都へ来た。浅井の死後美術院の指導に当たったが、浅井ほどには

うまくいかずやがて院を去る。梅原、安井をはじめ囑目された若手が外遊後京都に止まらなかった理由の一半を、彼のアカデミックな画風のせいにする向きもあるが、それはいささか酷であろう。

梅原、安井とともに明治二十一年生まれ。安井の生家は本綿問屋、梅原は呉服店、皆業である。ともに明治四〇年代にヨーロッパを歩き、梅原はルノアールの、安井はセザンヌの影響をうけて帰国したが、以来二人とも東京に移って梅原・安井の時代をつくったことは余りにも有名である。

黒田は大津生まれの大阪育ち、京都に来て浅井の内弟子になった。黒田は短い一時期を除いて京都を動かず、制作のかたわら関西美術院の教壇に立ち、また関西洋画壇の世話役として活動した。そのため関西の洋画史にくわしく、本稿も彼の著作に負うところが多い。

津田青楓は日本画家の谷口香嶠の門下。日本画から出て浅井に付いた。津田に限らず日本画家で浅井の門をたたいた人は多い。津田はその後再び日本画に転ずるが、河上藤博士との交友は世に知られるところ。

浅井忠は明治四〇年急に亡くなった。余りにも早く、京都在住は五年余にすぎない。にもかかわらず彼の名は永久に京都から消えないであろう。

浅井の死後、多少の曲折はあったが関西美術院の活動はつづき、須田国太郎、向井潤吉、伊谷賢蔵らが出る。須田は中京の商家の出で京大文学部を卒業して美術院に学び、スペインに留学した。彼は

油絵という技法によって日本の風土の本質をとらえた画家と評される。

京都下京生まれの向井は早く東京に移ったが、若いころの模写と後半期の民家が有名。今も元気で制作にはげむ。伊谷は鳥取生まれで京都高工の図案科卒。伊谷は行動美術、須田は独立美術に所属したが、京都の洋画壇は在野系が多い。

関西美術院以外では太田喜二郎（明治一六年～昭和二六年）がある。西陣の生まれで、東京美校では黒田についた。京都の洋画では珍しい官展系だが、関西美術会にも属し、派閥にとられず京都の洋画壇のために活躍した。

なお関西美術院出身の京都在住の現役作家としては洋画の川端弥之助と染色図案の田中吉之助らがいる。

## 工芸

明治のはじめ工芸はまず伝統産業の近代化という形で振興がはけられた。技術伝習生の海外派遣、試験所の設置、博覧会の開催がそれである。有田窯にいたドイツ人の化学者ワグネルが京都のために骨を折ったのもこのころのことである。こうして「官民一致」の努力はしだいに成果を高めていく。

明治二十三年、帝室技芸員制度が創設され、その第一回到五代伊達弥助、つづいて三代清風与平、並河靖之、二代川島甚兵衛がこれに選ばれた。以上は明治期だが、大正には初代伊東陶山、初代諏訪

蘇山がある。

伊達弥助（弘化一年～明治二五年）は五世を名のっているように代々弥助を称する西陣織の旧家の出である。明治六年のウィーン万国博に行き、博覧会の後、伝習生として西欧の技術を吸収し、紋織技術の改良、意匠の工夫など西陣織の発展に指導的役割を果たした。北野天満宮の北門に彼を顕彰する「西陣名技碑」が立つ。

清風与平（嘉永四年～大正三年）は兵庫県の生まれだが、清風家の養子となり工芸界の第一人者と評判された。青磁、白磁に品格の高い作風をみせ、作品に当時「風塵の外に超出す」といわれたおまかげをしのばせる。

並河靖之（弘化二年～昭和二年）は京都の生まれ。愛知の七宝技術を学び、養家である並河家の家職・宮家の家従を辞して制作に専念した。その有線七宝の技術は、無線七宝を発明した東京の濤川惣助とともにわが国の七宝技術を代表する。

二世川島甚兵衛（嘉永六年～明治四三年）。ゴブラン織を研究して綴錦に応用、壁掛などの大作をつくり、美術織物の発展に大きな足跡を残した。

帝室技芸員にはならなかったが、金工の秦蔵六、図案の神坂雪佳、陶の四代清水六兵衛、織の龍村平蔵らも忘れ得ない人たちである。

明治も後期になると「工芸とは何か」という問いかけが起こってくる。洋面の項でのべた中沢増太、浅井忠、日本面の谷口香嶺ら、

った。日本の民芸派グループの指導者格で、重厚、質朴な独自の作風をもつ。

ここで河井が学んだ京都市立陶磁器試験場にふれる必要がある。

試験場は明治二九年に創設され、同三二年から伝習生をおくようになった。ここからは右の河井のほか、河合栄之助、河村靖山、伊東翠壺、宗野宗鑑、同三吾、楠部弥次、それに市立芸大の学長をした近藤悠三ら、多くの逸材を出している。初代の場長藤江永孝は金沢出身。東京で学びワグネルについていたこともある。農商務省の技手から京都に来たとき彼はまだ三十二歳。業界の古者たちと衝突することもあったらしいが、大正四年京都で亡くなるまで工芸界の指導者の一人として活躍した。

工芸には京都市生まれの人が圧倒的に多い。なかには帝室技芸員だった陶芸の諏訪蘇山が九谷焼の出、最近では同じく石黒宗磨が富山出身という例もあるが、全体としての傾向は変わらない。その理由としては「家業」であるが多いこと、また学校も含めて修業の便宜が得られやすいことなどがあげられよう。

## 映画

映画輸入の経路はいくつかあるようであるが、その一つ、京都の実業家稲畑勝太郎によるシネマトグラフの輸入は経路も時期もはっきりしている。彼は会社の用務で渡仏中にかつて留学生時代に同窓であったオウギニスト・リュミエールに再会し、その発明にかかる

美術界からの働きかけがあったことは、美術と工芸との接触を物語るものとして興味深い。

大正に入ると工芸界にも世代の交替がおとずれる。今は陶芸界の長老である楠部弥次も青年陶芸家の一人として同志たちとともに旧世代に挑戦ののろしをあげる。さらに大正一四年パリで開かれた現代装飾美術工芸展で既成の大家に代って龍村平蔵や山鹿清華がグラブプリを得たことは、作家の独創性を第一とする時代の到来を告げるものであった。

龍村（明治九年～昭和三七年）は大阪で生まれ、京都に来て織物をはじめたというから異色である。彼は織物の改良から古代裂の複製に進んだ。この方面の現存者としては、唐織及び羅の研究で無形文化財の指定をうけた喜多川平朗がいる。山鹿清華は日本画から図案に転じた。色彩豊かなその作品はつねに新鮮で、綴錦を美術品の価値にまで高めたといわれる。現在は染織界だけでなく京都工芸界の最長老。

この時期におけるもう一つの新しい動きとして柳宗悦による民芸運動がある。宗悦は大正の後期京都に居を移して「美と用の一致」を説いた。陶芸の河井寛次郎、浜田庄司、さらに富本憲吉はこの系統に属する。富本は奈良出身で戦後京都に移った。もともと彼の作風はしだいに民芸風から離れ、晩年はむしろ華麗さが持味になる。

河井（明治二三年～昭和四一年）は東京高等工芸を卒業して京都陶磁器試験場に学び、そこで親交をむすんだ浜田らと民芸運動に入



シネマトグラフの東洋における供給権を得て帰国した。明治三〇年一月のことである。  
三 省 野 牧  
稲畑は後に大阪に進出し、大阪商業会議所会頭、貴族院議員を勤めた人であるが、当時としては進歩派の実業家であったから、彼がそのまま映画事業にたずさわっていたら、日本映画の近代化はもっと早かったかもしれない。しかし当時の興行界の風習が彼になじまなかったのであろう。彼はその事業を友人の弟、横田永之助に託した。

横田は彼のもつ興行師的性格の故に批評家や研究家の評価はかんばしくないが、横田商会を起こし、日活を支配した当時の興行界の実力者の一人である。

ところがこの横田の協力者から出発して日本映画に新しい時代をひらいた一人の人間が現れた。牧野省三である。洛西等持院の一角に和服姿の彼の銅像が立っている。等持院は、大正一〇年牧野が独立して牧野教育映画製作所を創設して以来の故地である。彼の生涯は日本映画の近代化への転換期そのものだったといってもよい。

銅像の台石にきざまれた碑文はいこう。

先生ハ明治十一年京都ニ生レ 家業タル劇場経営ノ経験ヲ提テ 明治四十年コノ新興ノ事業ニ投ジタ 爾後昭和四年京都ニ没スル



マデ 常ニ斯道ノ先覺トシテ 企業ト芸術ノ両面ヨリ 日本映画  
創建ノタメニ尽瘁 倦ムコトヲ知ラナカツタ 日本映画ハ先生ノ  
創意ト工夫トニヨツテ映画ノ祖國歐米ニ遅ルコトナク ソノ特  
質トスル表現上ノ技法ヲ悉ク身ニツケルコトが出来タ 日本ニオ  
ケル最初ノ監督ハ先生デアツタ プロデュサーノ制度モ先生ニヨ  
ツテ確立セラレタ 教育映画ノ創始者モ亦先生デアツタ 俳優  
監督 ソノ他 志ヲコノ新天地ニ伸ベントスルトコロノ俊秀 門  
下ニ集ルモノ枚挙ノ暇ナク 時人先生ヲ称シテ 日本映画ノ父ト  
言フ…… (原文のまま)

華やかな、そして苦悶の日々であった。

牧野が死んでほだなくマキノ・プロダクションは消滅するが、そ  
の死を越えて日本映画は発展をつづけ、マキノで育った人たちが活  
躍する。京都映画界の黄金時代である。牧野は横田商会時代に尾上  
松之助を見出したが、阪妻、月形、右太衛門、千恵蔵、寛寿郎らの  
時代劇のスターたちはみなマキノの出である。例外は大河内の日  
活、林長二郎(長谷川一夫)の松竹下加茂くらしいものだろう。マ  
キノ雅弘は長男、東映の制作担当者であった光雄は次男、また同じ  
く東映の監督であった松田定次は牧野が妻女以外に生ませた子であ  
ることは多くの人が知るところ。

京都の映画界について語るべきことは余りにも多い。それは日本  
映画史のなかば以上を語ることになるからである。ただ牧野と同時  
代に活躍した多くの映画人もあるいは他界し、あるいは引退し、京

ニス映画祭で銀獅子賞を得た「雨月物語」をはじめ作品も京都で作  
られたものが多く、死んだのも京都である。

### 能・狂言

幕末最後の禁裡能の記録によれば、シテ方として宝生を除く各流  
が勤めているが、現在では観世、ついで金剛で、他の流派はいうほ  
どのものをもっていない。

観世は御所出仕の大夫家であった片山家が、一門の総元締格であ  
る。今はもう消滅してしまつたが、京都独特の芸統である「京観  
世」の処遇が京都の観世流の久しい宿題となつていた。京観世とい  
うのは、江戸時代の中期ごろから京都に根づいた素謡を専門とする  
一派で、謡だけで能を演じない家系もあつた。この京観世の謡を宗  
家ニ東京風に統合したのが元義・左近父子の功とされている。

元義は観世二三代宗家清孝の三男。片山晋三の養子となり、九郎  
三郎、後に九郎右衛門を名のつた。事情があつて片山家を離れ、観  
世元義を称し、大正九年に没するまで京都に在住した。観世二四代  
家元左近(元滋)は彼が片山家でもうけた実子で、現行の観世流謡  
本は左近が家元の時代に編さんされたものである。

左近が家元をついだ後の片山家は弟の博通がついだ。博通は若い  
とき結核をわずらい、また外交官を夢みたこともあつて中年からの  
修業となつたが、九郎右衛門を襲名してよくその責を果たした。イ  
ンテリらしい一面をもっていたが、演能中に倒れ、そのまま亡くなつ

都を離れたりして現住する人も少なくなった。そのなかで伊藤大輔  
は今も長老格として健在である。

伊藤は四国松山の出身。無声映画時代「忠次旅日記」(昭和二年)  
で一流監督としての地歩を固めたとき、彼は三〇歳になつていなか  
つた。日活で大河内伝次郎をスターに育てたのも伊藤である。監督  
と映画会社との対立はこの世界では珍しくもないが、彼ほどけんか  
別れを数多くした人も少なからうといわれる。老いても映画への情  
熱は衰えず、今も「同人・時代劇」というグループに名を連ねる。

このグループの構成員は伊藤の外、犬塚稔、八尋不二、依田義  
賢、加藤泰、結束信二、吉田哲郎、森田新の八人。昭和一〇年ごろ  
鳴滝八人組(ペンネーム「梶原金八」)が三村伸太郎、稲垣浩、滝沢  
英輔、山中貞雄ら当時の若き逸材八人であつたのと人数は同数であ  
るが、時は流れて双方に共通するのはシナリオライター八尋不二た  
だ一人である。

女形出身でマキノの監督になり、松竹下加茂で活躍、戦後も大映  
などで多くの作品を作つた衣笠貞之助は住所だけは現在も京都北白  
川にのっている。所在がわからなかつた彼の実験映画「狂った一頁」  
が数年前発見されて話題になつたが、発見の場所はこの家である。

女性、とくにしいたげられた女性をえがいて絶品といわれた巨  
匠・溝口健二が亡くなって早二〇年になる。溝口は東京湯島の生ま  
れ、日活向島にいたが大震災の後京都に移つた。気難しくて凝り性  
で、周囲の人を悩ませたが、同時に人をひきつけ尊敬もされた。ベ

た。なお博通の夫人は井上流現家元愛子で、祖父晋三の夫人は先代  
に当たる三世春子、元義の別れた夫人は春子の娘と、片山家と井上  
流との因縁は深い。

金剛流の現宗家は、弟子家である。現宗家から数えて三代前の禎  
之助は名人といわれた野村三次郎の弟子で、阿波藩のお抱えとなつ  
たが、藩主の推挙によつて本人とその子の二代に限つて金剛姓を名  
乗ることを許された。よほど芸のできる人であつたにちがいない。

その子の謹之助も天分に恵まれ、明治初期の苦境期を乗りきつて関  
西能楽界で重きをなした。彼は器用で何でもこなしたが、とくに面  
打ちに秀で、明治三十一年の豊国祭大能に豊公謡曲の一つ「柴田」を  
演ずるに当たつて、自分の打つた面をかけてシテ秀吉を演じたとい  
う話が伝えられている。

謹之助の跡を嫡子厳がついだ。先代厳である。容姿にめぐまれて  
華やかな舞台にその妙をうたわれたが、宗家金剛右京の死後、四流  
宗家の推せんによつて金剛の宗家となつた。また父ゆずりで能面の  
研究には一言言をもつていた。ただ、旧宗家が京都に移つたりして  
坂戸座以来の芸統を伝えながら流勢が振わないのは惜しまれる。

＊ ＊ ＊

京都の狂言は大蔵流・茂山千五郎、同忠三郎の両茂山家である。  
一〇世茂山千五郎正重(先代千作)ほど市民に親しまれた狂言師  
はまれであらう。彼は町家の余興にも心よく出演し、またこども狂  
言や学校巡回にも力を入れて狂言を広め、多くのファンをもつた。

元治元年の生まれ、父は狂言好きで知られた彦根藩のお抱えであったが、維新とともに扶持を離れ他の能役者同様生活にも苦労した。

駅の切符切りや西陣の織屋の走り使いもした。こうした苦労と狂言への愛着が、普及に情熱をもやすこととなったのであろう。柄が大きくて男前、後半世は信心家で洛陽百社奉頓狂言などを実行したが若いときには逸話もあったらしい。谷崎潤一郎の「月と狂言師」にも登場する。明治、大正、昭和の八〇年を演じぬいて昭和五年に死去するが、その死に当たって谷崎は「年齢、閨歴、技量、人物、あらゆる点で一頭地をぬきんでいる巨星であったと語っている。

忠三郎家では先々代の忠三郎がしばしば東京の舞台に立ち名人の評を得た。忠三郎家は右の千五郎の父が八世茂山久藏英政の養子となり、宗家のほからいで千五郎正虎を名のったとき、同門の小林卯之助が分家茂山を立て、千五郎の幼名忠三郎を襲名したという関係である。

先代忠三郎は京都武徳会で水泳の教師をしただけあって、鶴のようだといわれた父に似ず堂々たる体格の持ち主であった。声量も豊富、芸風は千五郎と反対に茫とした中に滋味があるというタイプであった。和泉流の野村万蔵は彼について兄分として信頼を寄せていたが、不幸病を得て大成をみなかった」とその他界を惜しんでいる。

先代の死後、子の倅一が忠三郎を襲名したが、千五郎家が先代千五郎（現・千作）、当主とその弟と子どもたちと三代そろって舞台上に立っているのに対し、忠三郎家は当主ただ一人なのは少し寂しい。

三〇数流を数える。昭和五年の有名な「新興いけば宣言」には、京都から桑原専溪と評論家の重森三玲が参加しているが、専溪は勅使河原蒼風のようににはならなかった。

華道の祖は池坊である。各流派はすべてここを源流としているといつてよい。だから池坊流といわず、単に華道池坊と称する。今の家元池坊専永は四五世、通称六角さん、紫雲山頂法寺の管長である。一般にいうところでは池坊の初代専好は慶長期（一六〇〇年前後）に活躍した人で、その専好はまた元祖専慶から数えて一三代目とされている。とにかく古い家柄には違いないのだが、四五世という計算はどこから出たのか。聞くところでは六角堂創建説話に、出る小野妹子を祖としてのことだという。古格を誇る池坊も戦後はいろいろの改革を試みた。池坊文化学院、池坊短期大学の開設などがそれである。また東京にも進出、お茶の水学院を開いている。

京舞・井上流は、祇園の花街に立てこもり、邦舞界としては特異な存在である。現家元、四世片山愛子の説明によれば、井上流の構成要素は、①御所風の所作、②能、③人形ぶり、④地唄をもととする座敷舞などからなるという。

先代三世春子は天保九年の生まれ、昭和一三年、数えて百一歳で亡くなったが「雀百まで踊り忘れず」を地でいった人で、死の前年に開かれた「百寿の賀」でめでたく舞い納めている。能の観世流片山家との姻戚関係はさきのべたとおりだが、能の型を最初にもち込んだのは二世井上アヤで、アヤは金剛流だったと現家元は解説している。

## 茶道・華道・京舞

裏千家、表千家、武者小路の三千家と藪内。京都は茶道のメッカである。まず千家十職をかかげよう。

楽焼Ⅱ楽吉左衛門、釜師Ⅱ大西清右衛門、一閑張細工師Ⅱ飛来一閑、塗師Ⅱ中村宗哲、表具師Ⅱ奥村吉兵衛、竹細工師Ⅱ黒田正玄、袋師Ⅱ土田友湖、陶器師Ⅱ永楽善五郎、金物師Ⅱ中川浄益、指物師Ⅱ駒沢利斉、それぞれ十数代の家業を継承し、伝統に忠実でしかもすぐれた技術をもつ工芸家たちである。

各流派の門弟の数からいえば裏が最も多い。その理由の一つとして裏の「大衆化路線」があげられる。都をどり、客にみせる芸妓のお点前は椅子式だが、これを採用したのは裏の二一代家元玄々斎で、明治の開化にふさわしい簡素化をむねとして立礼を採用したのでという。また先々代に当たる円能斎は学校茶道に注目して女学校でお茶を教えた。いったんその流になじんでしまえば、よほどのことがない限り他の流に移ることはない。まことにめざとい着眼といわねばならない。好悪は別として、そのためどちらかといえば古式を守った表や他の流派は裏に大きく水をあけられる結果となった。現在でも裏の家元は文化団体やスポーツ団体に關係し、また外郭事業体の出版も活ばつて社会的接触が広い。

華道は俗に二千流といわれるほど流派の数が多く、京都だけでも

春子・愛子と、二人をめぐる人たちのことは昭和三五年北条秀司作の新派「京舞」で舞台にのり、後にまた鷹治郎も演じた。愛子の役は前者で水谷八重子、後者は中村玉緒。だから現家元は、「舞台の私はたいへん美人で本物と大ちがい」と釈明している。

## おわりに

ここまで書いて書道、彫塑、文学、音楽、演劇等は全部割愛せざるを得なくなった。もちろんこれらの部門にもせて名前だけでもという人物がある。たとえば書道では大正から昭和前期にかけての山本寛山、内藤湖南、長尾雨山、狩野君山ら、また彫塑では明治期の名作を残した仏師、田中紋弥、文弥父子などである。

しかし、全体としていえばこれらの部門は京都としての特色に乏しいことは争えない。文学でいえば名作の舞台にはなったが、「文学不毛の地」とさえいわれる。

最後に一人仏教界から登場願おう。大谷光瑞（本派本願寺管長・明治九年（昭和二年））である。彼は明治三五年から大正三年までの一三年間に三回にわたって学術探検隊をアジア奥地に派遣した。まだ国としてそこまで手がまわらない時代に、光瑞は宗門の人と財力を惜しげもなくこれに投じた。スケールの大きい人物とは彼のような人間をいうのであろう。

なお、文中の人名は、簡略を期するため物故者、現存の人を問わず敬称を略させていただいた。了承をいただきたい。

（元・京都府立総合資料館長）

人物を中心とした

## 文化郷土史

— 大阪府 —

中川啓史



## はじめに

明治以来、近代工業のすばらしい発展に引きくらべ、文化、教育、学問に対してはあまり意を注ぐこともなく、またさしたる成果もあげていないと言ふのが、わが郷土大阪に対する世のおかたの批判の一致するところである。浪速っ児としてはまことに無念なことながら、それがあつた程度までの射てゐることを肯定せざるを得ない。

たしかに、江戸時代には幕藩体制にのかつて極論すれば寄生虫的性格をもつて経済的優位に立ち「天下の台所」として君臨する余裕が、元禄以降の町人文化を産んだことは否めない。しかしそれだけに、幕府が崩壊して基盤を失つた時の打撃の深刻さは今日想像もつかぬほどのものであつた。以来百年余、時としてさまざまな努力がなされたとはいへ、大局的に見れば経済的地盤沈下の防止に大わらわで、とても他の方面にまで手がまわらなかつたというのが苦しい言い訳ながら事実である。

大阪府は沖繩県と並んで全国でも最も面積が狭く、平均して気候は温暖で自然の厳しさと対決することも少なく、早くから文化がひらけ、沃土が多いがゆえに生活の厳しさもまたあまり感じなかつたし、また一方で社会交流の機会に恵まれていたために「思い詰める」ことも縁が薄い。そこには陽気で、気さくで、楽天的な笑いの文化が継承されて行くのもまたごく自然の勢いであつたと言える。

苦境に陥つた時から、芝居主文楽軒正井大蔵としての彼と文楽との縁が結ばれた。

明治元年、大阪府が外国人居留民対策の一環として松島新地（大阪市西区）を開発した折、その振興策として人形浄瑠璃の移転誘致を府から依頼された彼は、各地に細々と存続していた小屋を振り切り率先父祖伝来の地、船場を離れて、同五年正月からこの地に移り「官許人形浄瑠璃文楽座」の看板を掲げた。「文楽」座をはじめて名のり、以後人形浄瑠璃の世界における指導的地位を占めるに至つたわけである。今日文楽と言へば人形浄瑠璃を指し、人形浄瑠璃と言へば文楽を意味するゆえんである。

その後、文楽座は東区御霊神社に移り、明治四十二年（一九〇九）松竹合名会社を経営権が譲渡されて南区四ツ橋畔に、戦後は道頓堀朝日座にと転じ、経営母体も昭和三十七年から財団法人文楽協会に変わるが、「文楽中興の祖」と言われるように、困難な時期をよく切り抜けた彼の存在は極めて大きい。

一方、義太夫節そのものも庶民の間で広く愛好され、素人義太夫が流行し、若い女性の間にも、あでやかな姿で高座に上る傾向が見られるようになった。もちろん世間一般の眼は冷たく、これを軽視する風潮が支配的であつたが、この女義太夫を「品位ある芸術」と認めせるところまで地位を高めるのに功績があつたのは豊竹呂昇（本名永田仲子 一八七四—一九三〇）である。彼女は名古屋の塩物問屋の娘として生まれたが、一歳のときから義太夫節を習いはじめ、たまたま当地に巡業した豊竹呂太夫に見出されて入門、一八

しかし、明治以降の厳しい受難の歴史は、経済的に豊かになるうとすればするほど新しい難問をかかえこみ、発生させたこともまた事実であつた。さきに述べた陽気さの反面、社会問題の発生に眼を向け、啓蒙主義的と批判されるような限界があつたにせよかなり暗い面に触れたものが多く生じたという、一見相矛盾した傾向の併存こそ、近代百年の大阪の文化の特色と言うことができよう。

本稿では、単に人名羅列のひとりよがりではないの引き倒しになりかねない、いわゆる郷土人物史の弊を極力避けることに留意した。そこで上方文化の伝統を引きつづぐもの、全国的に影響を与えるようになったものにしほり、また多くの人々を快く迎える土地柄から、出身地よりも活躍の場を大阪に求めた人にも触れるようにした。その反対に大阪出身ではあるが、ただ単にそれだけである人とは思ひ切つて対象からはずした。そのため言及しなかつた人々が多数あることをご寛恕願いたい。

## 人形浄瑠璃

大阪の最も代表的なものとして、広く海外にも知られている人形浄瑠璃は、明治維新期の混乱の中にあつて、能楽・歌舞伎などともにも大打撃を受けたが、この危機に登場したのが四世植村文楽軒（一八一三—一八八七）である。彼はもともと製薬業者であつたが、当時の大阪商人の伝統を受けついで早くから文化面にも関心と理解を示していた。たまたま天保の改革によって、難波神社（大阪市南区）をはじめ、主として社寺を興行地としていた人形浄瑠璃が



豊竹呂昇

歳のときに来阪し、師の名を冠して呂昇として女義界に登場した。自らも三味線をひく、いわゆる弾き語りはこの頃から次第に減少しつつあったが、呂昇一座はその後も古

風を堅持した。一部には必ずしも本格的な芸ではないという批判もあったが、上品な語り口と美声で人気を博するにつれて、他の女義太夫たちを大いに刺激するようになり、盛況につられてとかく芸が軽薄になり勝ちな弊風をいましめ、彼女らがいつそう熱演する因をなしたと言われている。常打ち場であった松島の播磨席が千日前に進出するに至ったのも彼女のお蔭であった。また数多くのレコード吹込みを遺しているが、終生ひたすら前向きの意欲的態度を持ち続けたのは立派であった。

数多くの名手の中でもとくにすぐれたトリオと惜しまれるのは、人形遣いの初世吉田栄三（本名柳本栄次郎 一八七二～一九四五）及び彼と組んで全盛時代を現出した同じく人形遣いの三世吉田文五郎（本名河村巳之助 一八六九～一九六二）と太夫の豊竹古靱太夫である。

このうち吉田栄三と吉田文五郎はともに数少ない大阪生まれの大阪人としてその生涯を大阪で送ったが、とくに昭和三十一年難波の称号を送られた文五郎は、九二歳で倒れるまで、上方の伝統で

と考え、離合集散の激しい動きの中にあつて、新演劇本来の写実芸に対する研究と吸収を怠らず、数多くの名作大作を次々と上演して、旧派演劇の領域を浸蝕するとともに、観客層を新しく拡大して人々の演劇に対する眼を変えさせ、関西新派を確立した意義はまことに大きいと言わねばならない。

新派勢力が次第に東京に吸収されようとする折、またさまざまな経過はあったものにもかくにも庶民の笑いの源泉であった上方落語が一まず完全に凋落するところ、すなわち日露戦争前後から新しく登場したのは松竹合名会社のもと、曾我廼家五郎・十郎一座の喜劇団である。

五郎（本名和田久一 筆名一堺漁人 一八七七～一九四八）は堺市の生まれで、一六歳の時歌舞伎俳優中村瑚郎に入門して瑚之助の名で舞台に立っていたが、千日前の改良座で鶴屋団十郎の「俄」（仁輪加とも書く）という、天保年間から盛んになったあまりまともとは思えない喜劇をみて、同じく中村時代の名で舞台に立っていた十郎とともに、笑いに飢えた大衆を狙って新劇団を結成したのである。当初は二人三脚を意味して、前後亭右・前後亭左と名のり、堺や伊丹で興行したが不評であった。ところが日露戦争中という雰囲気を利した「無筆の号外」が大当たりしたことから隆盛に向かい、東京新富座に進出するまでになった。五郎の濃厚で粘り強い、十郎の淡白でひょうひょうとした対照的な芸風が巧みにかみ合わされて人気を呼んだと言われている。二人は後に別れ、五郎は渡欧後単独で「平民劇団」を組織して失敗し、初心に帰って「五郎劇」で成功

ある世話物に独特の色気と変化に富む生氣をもつて精彩を放ち、今日なお多くの人々に感銘を残している。

また古靱太夫は東京生まれで、昭和二年秩父宮家から山城少掾藤原重房の掾号を贈られ、世に山城風と言われる語り口を完成させたが、単に、舞台面のみに止まらず、戦後再び訪れた文楽の壊滅寸前の危機に際して、文五郎とともにあらゆる障害を排除しつつ後進の育成にもつとめ、よく今日あらしめる原動力となった。

### 新派劇と新喜劇

日清戦争中、東京でもてはやされた新演劇が、戦後ほどなく飽かれはじめたところ、新しい劇団を素直に受け入れ、育成してくれる土地として選ばれたのが大阪であり、この旗印が劇団「成美団」であった。その中心人物の一人喜多村線郎（本名六郎 一八七一～一九六二）は、東京日本橋の薬種商の出であるが、二〇歳のころ素人芝居に伊井蓉峰と出演したのがきっかけとなって新派劇に入り、明治二十九年（一八九六）「成美団」を結成した。彼は一〇年後に東京に帰り、真山青果を招いて本郷座を中心に活躍し、大正時代には伊井、河合武雄とともに重鎮となって長く活躍するのは周知の事実であるが、この一〇年間の大阪における活躍は、彼自身や新派劇の歴史にとってはもとより、大阪そのものもまた大きい影響を受けたという点で特筆すべきものである。

はじめは道頓堀角座、後には朝日座を中心に、彼自身の述懐によれば「芸術の香りなどみじんもなく、ただ大向うに踊ることばかりに努めたようなもの」とはいえ、一人で活躍するには探偵物に限る

した。

彼はまた自ら多くの脚本を物したが、彼の開拓した新しい喜劇の分野は、十郎門下の十吾（一八九一～一九七四）と、松竹家庭劇の二代渋谷天外（本名渋谷一雄 一九〇六～）が合流して昭和二十三年結成の松竹新喜劇へと継承され、現在は藤山寛美がその中心となっているが、創始者五郎が演じた「阿呆な真似をして笑われる俄から脱却して、阿呆な真似に、人間が共通して持っている弱点を見せ、そこから笑いを生ずる」精神は、寛美演ずる「人はみなアホだ」という思想に裏付けされて、アホによって既成の価値が、またアホの位置そのものが逆転される「仕ぐさに爆笑をまきおすことに連綿として受けつがれてい



藤山寛美

また天外が筆名館直志（建て直しに通じる）の筆名で、数多くの名作を物しているのも伝統と言うべきであろうか。

### 戯曲

東京で古河黙阿弥らの散切物が隆盛を極めていたころ、大阪は新聞小説の脚色と多作とで対抗していたと言える。進取性という点では評価されるにせよ、近代戯曲としての独立性とは程遠いものではあったが、これが新歌舞伎を發展させる因子となったことも事実

である。その最も代表的な作家としては高安月郊（本名三郎 一八九一～一九四四）をあげることができる。月郊は高名な医家道純の長男として船場に生まれ、当然のごとく父祖伝来の業を継ぐ志望をもっていたが、次第に文学に志し、はじめは漢詩文にその才を発揮するようになった。やがて西欧ロマン主義作家に親しみはじめ叙情詩「犠牲」を発表するが、明治二十六年イブセンの「人形の家」「社会の敵」の一部を翻訳紹介した。ついで明治二十八年、叙情的劇詩ともいえる「重盛」を発表（出版は翌年）したが、これが彼の戯曲処女作である。

以後「公曉」「月照」「大塩平八郎」「リア王」と続々発表した。が、古典に近代詩的精神を盛りこんだとして話題になった。三十六年東京明治座で上演の「江戸城明渡」は、川上音二郎（勝）と高田実（西郷）という組み合わせのせいもあって評判になり、これが彼の出世作となった。時の流れに乗って勝つも、敗れて流されるものだ誠あるのみという主張は、その後も長く人々に支持されて行くことになった。

月郊はまた演劇改良運動にも参加したが、早くから注目され期待されていた西欧的教養は次第に影を潜めるようになった。時流に早すぎて世に受け入れられなかった「平賀源内」に共感し、また「華山の魂」に著者自身を投影したと言われるが、この二作がとりも直さず、大正期の彼の代表作となっており、また大阪の誇る代表作でもある。

## 詩・和歌・俳句・川柳

明治初期には詩とは即ち漢詩を意味し、泊園書院の藤沢南岳や日柳政朔（号三舟）らが活躍したが、新体詩の時代に入って、藤村の影響を受け、藤村や晩翠と比肩される薄田泣菫（本名淳介 一八七〇～一九四五）も大阪とはなはだ縁が深い。

彼はもともと岡山県浅口郡連島村（現倉敷市）の出身であるが、彼の処女詩集「暮笛集」は明治三十二年大阪の金尾文淵堂から出版された。また第二集「ゆく春」（三十四年刊）は一段と評判がよかったが、この間に来阪して金尾文淵堂の雑誌「小天地」の主宰となり、一時大阪毎日新聞社にも籍をおいた。

「金剛山の歌」（三十六年）を経て「白羊宮」「葛城の神」（ともに三十九年）に至って絶頂期に達したが、四十二年から散文に転ずるに至るまで文語定型詩を完成した功績は大きい。

一旦離阪帰郷したが、四十三年から再び大阪へ出て大阪毎日新聞社に入り、学芸欄の充実に尽力した。小説では成功しなかったが、それを補ってあまりあるのは新進気鋭の芥川龍之介を社員に迎えたことであつたと言われる。

堺市が生んだ対照的な文人として河井醉茗（本名又平 一八七四～一九六五）と与謝野晶子（旧名鳳晶 一八七八～一九四二）をあげることができる。

醉茗は純心と平淡を心がけ、茅海散士の名で詩をものにしていったが、明治三十一年から「よしあし草」同三十三年から「文庫」の詩

歌欄を担当して新人の発掘育成につとめるが、四十年には「詩草社」を起こして口語自由詩運動の先駆となり、以後昭和四十年まで実に息の長い活動で貢献した。

この間、明治三十二年に高師の浜（現高石市）で主催した近畿文学同好者新年会に、文庫派の伊良子清白と明星派の与謝野鉄幹を招いたことが東西文壇をつなぐ手がかりとなり、浪漫主義運動が燃え



子 晶 与謝野  
上る機運を作ったことになる。なおついでながら夫人島本久恵の長編小説「長流」には彼の半生が描かれていて、わが国近代詩史の側面をよく伝えていると云われている。

河井醉茗とは対照的に情熱と華麗さで知られる与謝野晶子は、よのかんの老舗駿河屋の三女として生まれ、堺女学校補習科（現泉陽高校）卒業後、家業手伝いのかたわら詩歌を学び、最初は敷島会に属して旧派和歌を発表していたが、関西青年文学会の「よしあし草」に鳳小舟の名で詩を、さらに明治三十三年雑誌「明星」第二号から短歌を投稿するようになった。この夏、創始者で与謝野鉄幹に会って恋愛感情をいだき、翌年上京して新詩社の社友として「明星」に次々と作品を発表する一方、処女詩集「みだれ髪」を出版し、大胆な人間の官能解放をうたって世を驚かした。

歌集「舞姫」をはじめ次々と多作してわが国第一の名声を得た

が、日露戦争最中の三十七年八月雑誌「明星」に発表（翌年出版の詩歌集「恋衣」山川登美子・茅野雅子と共著に収録）した「君死にたまふこと勿れ」はあまりにも有名である。

しかしこの後、彼女の詩的情熱は急速に失せ、「新訳源氏物語」四巻や「新新訳源氏物語」六巻が世に与謝野源氏と称せられるほど古典への愛着を示した。

彼女と同じように源氏物語を愛し、亡師三矢重松の全講会を終生続けた折口信夫（別名釈超空 一八八七～一九五三）は大阪から東京へ出て活躍が目立った点でも似ているが、彼は大和飛鳥座神社神官を祖父とし、代々医を本業として生業と雑貨を営む西成郡木津村（現大阪市）の岡本屋に生まれ、天王寺中学（現天王寺高）から国学院大学へ進んだが、大正二年以降柳田国男の知遇を



夫 信 折口  
官を祖父とし、代々医を本業として生業と雑貨を営む西成郡木津村（現大阪市）の岡本屋に生まれ、天王寺中学（現天王寺高）から国学院大学へ進んだが、大正二年以降柳田国男の知遇を

得た。古典学者、民俗学者としても知られるが、とくに民俗学を根底に、上代の語彙と発想によりながら人間の悲しみを表現した短歌に、かつて「日光」の同人であった北原白秋が「黒衣の旅人」の称を献じたのは有名である。

大正期には、大阪生まれで高等小学校中退という学歴で、雑誌「表現」を発行し、「解放」の初代編集長となった百田宗治（本名宗次 一八九三～一九五五）は民衆詩人として知られ、「最初の一

人」(大正四年)「一人と全体」(同六年)など多数の詩集があるが、児童自由詩を提唱して「工作」を創刊その普及のため全国を行脚したほか、雑誌「椎の木」(大正十五年)を刊行して伊藤整、三好達治、西脇順三郎など多くの逸材を幅広く育くんだ功績は見落とせない。

これと対立した芸術派詩人たちは三木露風の雑誌「未来」によったが、この人たちは別に東京高師、同文理大、関学大、大阪大などの教授を歴任しながら詩作を続け、ギリシヤ的な優雅さと宗教的な敬虔の情を、繊細な感覚で表現した大阪生まれの竹友藻風(一九一〇―一九五四 本名庸雄)はその長い活躍期間とともに特異な存在とも言える。彼はまたその師上田敏の学恩に報いて「神曲」の訳詩集をはじめ多くの学術的著作も遺している。

わが国最初の未来派詩人と言われる平戸廉吉(一九一三―一九二二)は大阪生まれであるが、短詩運動の実践者安西冬衛(一九八九―一九六五)は奈良市生まれである。しかし生家は代々の岸和田藩士であり、彼自身も堺中学(現三国丘高校)を卒業している。大正



安西冬衛

八年から昭和九年まで旧満州の大連(現中国の旅大)に在住し、その間雑誌「亜」を創刊(大正十三年)しているが、豊かな知識と才気をもってイメージを自由に展開する中にやはり大陸風

活動の源泉となっていることを特記しておきたい。

最後には俳句の世界では青木月斗ら少数を数える程度であるが、川柳では岸本水府(本名竜郎 一八九二―一九六五)がすぐれている。三重県出身であるが、大阪に住みつき、雑誌「番傘」を主宰、初期の江戸川柳を模範としながらも近代感覚を重視し、叙情味豊かに人情の機微を描くことを提唱しているが、土地柄とマッチして広く支持されている。

## 小説

ノーベル文学賞に輝く川端康成(一九〇九―一九七二)は、大阪市北区の開業医の長男として生まれたが、翌年父と死別、西成郡豊里村(現大阪市東淀川区)の母の実家に移ったがその翌年母とも死別、ただ一人の姉とも離れ離れに祖父母とともに豊川村(現茨木市)へ転じたのもつかの間、五年後には祖母も亡くなり、祖父と二人のわびしい暮らしを続けるという、まことに薄幸の少年時代を送ったが、この時期に後年の文学開花の芽が育かれたと言われている。

茨木中学(現茨木高)在学中に出た処女作「十七歳の日記」(のち十六歳の日記と改題)から、地元の「京都新聞」や石丸梧平の雑誌「団楽」などへの投稿を続け、大正六年一高に入学して活躍の舞台を東京にうつすまでの短かい期間ではあったが、その後の文学活動の基盤を築いたと言える。

川端康成らの属した新感覚派の影響を強く受けたものに武田麟太郎(一九〇四―一九四六)と藤沢桓夫(一九〇四―)がいるが、

の詩的世界が構成されていると言われる。処女詩集「軍艦茉莉」(昭和四年)ほか数冊があるが、同九年から堺市吏員として勤務しながらさまざまな文化活動を行った点でも当時としては異色であった。

異色と言えば三好達治(一九〇〇―一九六四)もそうである。彼は大阪市西区に生まれ、市岡中学(現市岡高)から陸軍幼年学校、士官学校に進んだが肌が合わず中退して三高に移り、東大仏文科を卒業した。三高時代の友人堀井基次郎らと「青空」を出したが、これは萩原朔太郎の影響によると言われ、安西冬衛の「亜」や百田宗治の「椎の木」にも関係し、さらに堀辰雄らと「四季」(第二次)を刊行するなど幅が広く、昭和詩の抒情主義の牙城とまで言われるに至った。代表作は「測量船」(昭和五年)「駱駝の瘤にまたがって」(同二十七年)などであるが、基調とする古風な叙情が、藤村、白秋につぐ国民詩人たるゆえんとされている。

敗戦に至るまでの暗い谷間で多くの詩人が抵抗を放棄したかにあつて、小野十三郎(本名藤三郎 一九〇三―)は一段と光彩を放っている。彼は難波新地に生まれ、東洋大学在学(のち中退)中の大正十二年から第二次「赤と黒」同人となり、雑誌「弾道」を創刊した昭和五年ごろからアナキステックな傾向を帯びるようになり、解放文化聯盟に参加して「古き世界の上に」を刊行した。代表作「大阪」に見られるように、リアリズムをもってつらぬかれた詩風は、感情を除いた知的な詩論とともに定評がある。

また彼が昭和二十九年に創立した「大阪文学学校」は、連続と続いて今日に至り、多くの働く若い人たちを中心に、新しい文学

二人とも同年生まれの上、同じ今宮中学に学ぶという奇縁をもって、武田麟太郎は南区日本橋の生まれで東大仏文科を中退して「辻馬車」「大学左派」の同人となり、昭和四年に発表した「暴力」によってプロレタリア作家としての地位を確立した。その後弾圧と重苦しい空気のためだけに、庶民生活を通して社会批判を可能にすると考え、プロレタリア文学の公式主義を脱却して「日本三文オペラ」(昭和七年)をはじめ、「釜が崎」「銀座八丁」「市井事」によって市井作家として立った。その後「人民文庫」を創刊して文壇のファッショ化に抗したが成功せず、ライフワーク「井原西鶴」も未完のままに急死したのは惜しまれる。

彼と同窓の藤沢桓夫は、東区の漢学者黄坡(祖父は南岳)を父に、高名な学者一家の中で育ったが、旧制大阪高校生が中心となった同人雑誌「辻馬車」で長沖一らと活躍して横光利一にその新鮮さを認められ文壇に登場するようになった。マルクス主義の立場に立ちながら新感覚派の技巧のさえを見せ、新進作家として健筆を振ったが、昭和九年の「大阪の話」以後通俗小説に転じた。万人に愛され、喜ばれ、しかも芸術の香りをそこなわないという彼の念願はそのまま大阪の持ち味であり、他の作家と異なって長く大阪に留まった点と軌を一にしている。朝日新聞連載の「花粉」(昭和十一年)はその意味で最も代表的なものであるが、地元では「新雪」が今なお幅広く愛読されている。

武田麟太郎に見出された織田作之助(一九一三―一九四七)は天王寺区の仕出し屋魚春の長男として生まれ、高津中学(現高津高)



を経て三高に進んだが、下宿先で咯血し、出席日数不足のため退学した。昭和十二年単身上京し、スタンダーの「赤と黒」によって決定的な影響をうけ小説家に転じた。

昭和十五年発表の「夫婦善哉」や戦後読売新聞に連載した「土曜夫人」などデカダンス作家として注目を浴びていたが、咯血のため早世したのは惜しまれる。

大阪出身の作家としてはこのほか宇野浩二、井上友一郎、高橋和巳をはじめ、今なお活躍中の今東光、黒岩重吾、庄野潤三、山崎豊子や、壮大な歴史小説でますます円熟味を増している司馬遼太郎など枚挙にいとまがない。この分野ではようやく活況を呈してきたと言えるであろう。

なお大衆文学で直木賞を残した直木三十五（本名植村宗一 一八九一～一九三四）をつけ加えておく。彼は南区の古着商の子として生まれ、市岡中学（現市岡高）を経て早稲田大学に学んだが学費滞納で中退、春秋社に参加して「トルストイ全集」を計画したり、冬夏社で雑誌「人間」を発行するかたわら、三一歳で文芸評論を書き、以後年ごとに数を加え、三十四だけをとばして三十五とした。

「文芸春秋」の創刊とともに縦横の活躍を示したが、関東大震災後帰阪、大衆作家として再起した。「南国太平記」「楠木正成」「大阪落城」などきびきびした手法と異色の人間像の浮き彫りは、現代の剣豪物にも影響を与えていると言われる。

## おわりに

このほか尺八都山流の始祖中尾都山や音楽の分野で活躍中の朝比奈隆、辻久子、日本画の菅楯彦をはじめ言及せねばならない人物は枚挙にいとまがないが、紙面の都合上やむを得ず割愛した。冒頭に述べた意を汲んでいただき、また今日よりはなお明日の良きを希求する土地柄から、現存する諸大家はさらに一層のすぐれた業績をのこされることを期待していただければ幸甚である。

（大阪府立泉尾高等学校教諭）

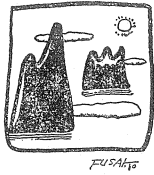


509-1

人物を中心とした

## 文化郷土史

—兵庫県—



小林 武雄

## 明治の曙、神戸開港

慶応三年（一八六七）十二月七日、西国街道の一港町にすぎなかった兵庫津に、開港の勅許が下った。近代都市、神戸への開幕である。

明治元年には兵庫津の豪商北風荘右衛門（正造）（一八三四―一八九五）らの建議によって、大坂鎮台管内に属する神戸は町民から兵を募って、鎮台長官醍醐忠順の所属の下に兵庫隊を組織し、市中警備にあたらせたが、この若者たちが無学で粗暴なふるまいが多く、かえって住民を刺激することが多かった。殊に、開港場として外国人とのトラブルや、不安を取除くことは必須の問題であった。

慶応四年（明治元年）四月、兵庫津の豪商岩間屋（神田）兵右衛門（一八四一―一九二一）は、開港場として外国人に遅れをとらないためにも、青少年の教育は必要であると痛感した。名主の安田善兵衛、北風正造らと相談した右記の願いは、すぐ許可された。普通教育の草創といわれた「明親館」の創設である。当時、兵庫県でも江戸時代の教育機関ともいえるべき藩校、郷学、私塾、心学舎、寺子屋など各地に散在していたが、『日本教育史資料』によれば明治四年の調査では兵庫県は八十八校の寺子屋があったと記されている。

神田兵右衛門（一八四一―一九二一）は播州印南郡大塩村（姫路市大塩町）の大庄屋梅谷庄左衛門の第三子として天保十二年に生まれたが、十五歳のとき兵庫の名門神田家の養子となり、二十四歳で家督を継いだ。明親館という校名は彼が親しくしていた当時の果知事伊藤博文と相談して名づけたもので、語源は「大学」から取ったと

いわれる。

### ああ信教の自由

近代日本の夜明けは、まさに信教の自由によって始まった、といつてよいであろう。明治政府はさかんに文明開化をとえ、欧米の近代資本主義文明を移入したが、「東洋の道徳・西洋の芸術」とい、制度・事業・組織・法律・技術・機械等、いわゆる物質文明に限っており、その根底にある宗教・思想・道徳などの精神文明はむしろ排撃した。天皇制体制の確立のためには、あえて排仏毀釈の運動を起こし、仏教そのものさへも払拭しようとした明治政府が、キリスト教を禁止したのは当然である。

明治六年（一八七三）婦人宣教師タルカットとダットレイは、米国伝道会社から派遣されてキリスト教伝道の熱意にもえて日本に來た。彼女は九鬼隆義・白州退蔵、同志社の創立者新島襄たち日本人有志の協力で明治八年十月、「神戸ホーム」と名づけられた現在の神戸女学院を創立した。明治前期の女学校教育をささえていたものは私立学校であった。しかもその私立女学校創設者の多くは婦人であった。神戸女学院のタルカット、ダットレイ、日ノ本女学校（姫路）のチ・ルチ、親和女学校の友国晴子、増谷裁縫女学校の増谷かめ、村尾裁縫女学校の村尾よし子、みな女性である。

友国晴子（一八五八―一九二五）は安政五年（一八五八）二月七日、東須磨村の豪農で代々庄屋をつとめていた甚左衛門の次女として生まれた。医師佐伯養順たち仏教教団の人達が、明治二十年十月、仏教主義の私立神戸親和女学校を設立。翌年晴子を教師に迎えた。

しかし開校当時は百余人もあつた生徒が、明治二十四年には僅かに五人となつたので一時閉鎖された。彼女は親和女学校再建を心に秘めて上京し、各種学校で新しい教育方法を学び滞在一年で帰神、須磨の実家から出資を得て明治二十五年（一八九二）神戸の下山手通に親和女学校の名義を継承、再建して自分が校長となつたが、生徒は二名であつた。さきに記したように、明治二十年代は国家主義的風潮に、条約改正問題もからんでミッションスクールにとっては苦難の時代であつたが、晴子は仏教主義によって「敬神崇祖」の理念をかかげ、出征軍人の見送りや、傷病兵の慰問など、生徒に手伝わして国家のために目ざましい活躍をした。こうして親和女学校は明治四十一年「親和高等女学校」となり、「誠実」「堅忍不拔」「温和従順」を校訓として本科、専修科合せて四百九十名の大女学校となつてゐる。また、明治二十二年（一八八九）碩母保田伝習所と碩栄幼稚園を併設したA・L・ハウ（一八五二―一九四三）はアメリカのボストン市外・ブルックラインで生まれたが、帰米中のJ・D・デビス宣教師の日本報告の講演に感激して、神戸教会の婦人たちが計画していた幼稚園設立を援助することを神の召命と感じ、デビスに伴われて明治二十年（一八八七）三十五歳で来神した。ハウが来神した明治二十年には間人たね子（一八四七―一九二〇）が「間人幼稚園」を創立している。

### 日本の新聞を育てた人々

新聞といへば元治元年（一八六四）海外のニュースを求めている日本人のために、日本語新聞をつくつてその要約をのせたジヨセフ

・ヒコ（一八三七―一八九七）の元治元年（一八六四）木版刷りの日本では初めての「海外新聞」がある。ヒコは加古郡播磨町の農家の生まれ。母の再婚で、船頭であつた浜田家で育てられ、十三歳の時住吉丸で江戸に出たが帰路遭難。アメリカへ漂流、アメリカ船に救助された。アメリカに帰化して神奈川領事館通訳として一八六一年帰国。外字新聞では「ヒ・イ・ゴ・ニュース」（一九六八）が発刊されている。

明治十年（一八七七）淡路洲本市の安部喜平（一八四一―一九一五）は低学年の人にも読める新聞の発行を計画し、「淡路新聞」を創刊。のちの新聞の先覚者三木善八（一八五六―一九三一）、鹿島秀磨（一八五二―一九三二）を編集員に迎えているが、筆禍事件を起こしている。明治十三年創刊の「神戸新報」はのちに日刊となるが、明治十七年には印刷兼発行者は三木善八・主幹鹿島秀磨、編集水本八郎、印刷部長佐野春五とみな淡路の人たちで、同年創刊の「神戸又新日報」は社長が鹿島、営業部長は善八となつておりこの時すでに善八の新聞営業に關する手腕がみとめられていた。その後、上京したが明治十九年報知新聞社長矢野電溪（文雄）に懇望されて営業部長に就任、淡路の人広瀬永太郎が入社して活版方面に力を注いだ。明治二十七年財政難におちいったが、大隈重信に激励され、報知の社主としてすべての経営を一任されたので、編集方針を根本的に改め、時節がら軍國的記事をますます多く、記事をわかりやすくして大衆向きの新聞を作るようにした。活字もルビつきにし、小説はもとより記事にも挿し絵をいれるなど堅苦しい型を根底から

改めた。このようにして壊滅の危機に瀕した報知をわずか一年間でもりかえた。また明治四十一年、島田三郎が経営していた「東京毎日新聞」が経営難におちいったので、これを買収して三木社主の許で経営している。大阪朝日の村山竜平、上野理一、大阪毎日の本山彦一と共に報知の善八は新聞界の四巨頭といわれるが、上野理一（一八四八―一九二〇）も兵庫県多紀郡篠山町の人。

上野は万延元年（一八六〇）十三歳のとき篠山藩儒官渡辺弗権に学んだが、同門の関達軒（一八五一―一九二二）は、明治十二年（一八七九）創刊の「朝日新聞」に編集長格で入社、同紙の大阪発行に努力を払ったが、上野とは経営者と編集長として朝日新聞を共に背負って働いた。教員組合創始者でもあるが、日本女子美術学校の創設、婦人新聞の発行など特異な活動を行ない労働運動にも熱心であつたが、大正十一年（一九二二）出版事業の積極化へ転身、平凡社を改組充実、翌十二年教育基本図書の出版を目標に教育関係図書多数を出版した下中弥三郎（一八七八―一九六二）も多紀郡今田町の人である。

### キリスト教と文化

R・W・ランバースが日本伝道のために来神したのは明治二十年（一八八七）である。彼は外人宣教師が日本の青年に接近するには英語を教えることだと判断したが、ある日アメリカ・セントルイスの雑誌編集長W・D・バルモア牧師が、ランバースをたずねて彼の仕事に関心をもち書籍と毎年百ドルを寄付することを約束したので、彼は着任後二日めから自分の部屋の一室を読書館と名づけて英語を

教えていたが、これをパルモア学院と呼ぶようにした。昼間は彼の母ランバス夫人が日本婦人に英語、編物、料理を教え夜は父のJ・W・ランバス牧師が英語を教えた。この学院は阪神間の中学、高校、大学生はもちろん昼間に働く青年たちが仕事を終えてから集まり、独特な伝統のパルモア精神を受け継ぎ、キリスト教教育と英語教育の両面で高く評価される。ランバスは大きな宣教のためには教育事業に力をいれなければならない、という信念をもっていたので、本国の伝道局を説得して神戸東郊原田村（現在の港区王子動物園）に一万坪の土地を購入したが、明治二十二年木造二階建七十八坪の校舎と、同平屋建五十七坪半の付属建物を建設。関西学院は成立した。また、老ランバス夫人による女子教育も実を結び、明治十一年神戸女学校を開校。のちにランバス記念伝道女子学校と名づけられたが、その後広島保育部と合併、さらに神戸女子神学校と合併して現在の聖和女子大となった。R・W・ランバスは一八五四年上海で生まれた。J・W・ランバスとメリイの牧師夫婦の長男である。アメリカでは教会最高の職務である監督にまでなった、ブラジル伝道の監督や中央アフリカ開拓伝道に従った。レヴ・ウォルター・ウェストン（一八六一―一九四〇）は英国サリイ州生まれ。青年時代からのアルビニスト。ケンブリッジ大学を卒業、聖公会の牧師として明治二十一年（一八八八）来日し、明治二十四年（一八九一）から二十七年（一九〇四）の間に数回にわたって日本中部山岳地方の山々をめぐるときわめて帰英。「日本アルプス」の名を宣伝した。宣教師ではないがグループは六甲山とゴルフ場の開祖として著名である。

さて、明治、大正期の青年たちがキリスト教に深い関心と共鳴を覚えたのは、単に英語を習い、新知識を学んで立身出世を計るためばかりではなかった。キリスト教は日本の伝統的宗教とは体質的に異なった宗教、むしろ邪教といわれていた西洋の宗教である。これを信仰するには青年の魂を動かす魅力がなければならぬ。それは神の「愛」であり、博愛と人間平等の精神であろう。

西川光次郎は淡路津名郡佐野村の生まれで、中学校卒業間近にキリスト教に入信、札幌農学校に転校、在学中で中退、東京専門学校（早大）に転じて在学中からマルクス・エンゲルスを信奉して社会主義運動に参加、卒業してしばらく毎日新聞で記者生活をしたが間もなく退社した。明治三十年平民社を興し新聞「平民」を発行したが再三発禁になったが、週刊「平民新聞」として明治三十六年（一九〇三）発行したが、同三十八年終刊。三十九年（一九〇六）「日本平民党」を結成した。そして社会悪とたたかった二十世紀開拓者といえば賀川豊彦（一八八八―一九六〇）を挙げなければならない。神戸市兵庫区島上町の賀川回漕店で生まれた。幼いころ父母と死別、徳島県板野郡堀江村の自家へ引取られた。その彼を病苦と貧苦から救いキリスト教に導いたのは保護者となった宣教師マヤス博士夫妻である。宣教師だけではない、この時代に来日した外国人には、個人的に敬愛すべき人格者が多く、この人間関係におけるヒューマンな温かさが、日本の青少年をキリスト教に結びつけたことは見逃せない。明治四十二年（一九〇九）十二月二十四日、神戸神学校の生徒であった賀川豊彦は神戸葺合区の新川貧民街に引越した。仲仕、土方、手伝い、工具が多かったが、ばくち打ち、泥酔者、



賀川 豊彦

やくざ、売春婦、不具者、精神薄弱者がおり、皮膚病や、トラコーマが住民に蔓延、道路・住宅は悪臭を放つなど劣悪な環境であったが、無抵抗主義を實踐し、貧民へは献身的に奉仕した。青年たちは彼の献身的奉仕に心服して「イエス団」を組織して彼をたすけた。新川に入

を学んだ。明治四十二年、自伝小説「耽溺」を発表して小説家としての位置を確立した。独創的な詩人であり、作家であり、行動家でもあったことが、生前誤解されてきた不運な作家でもあった。

#### 山陰山陽の美術家たち

さて、明治、大正、昭和と、神戸・芦屋・西宮に仮住し、あるいは去った著名な文人・画人は枚挙に暇がない。日本画の橋本関雪（一八八三―一九四五）は神戸市兵庫区荒田町で生まれた。八歳で片岡公廣について南宋画を学び、十八歳のとき竹内栖鳳について学んだ。大正二年（一九一三）中国旅行によって四条派と南画風に写実味を加えた独自の画境を開拓。初期文展に「暹日」「寒山拾得」など出品。画家として独自の画風を認められた。昭和十年帝國美術院会員となったが、翌十一年（一九三六）これを辞退している。独自の画境を創造したが、富岡鉄斎（一八三六―一九二四）のような自由奔放に漢画・南画の線にそって進めなかった。四条派の持巧がそれをさまたげたとも言えるだろう。なお、鉄斎は京都の人だが、



村上 華岳

明治五年・別授官幣社漢川社に明治天皇をお迎えしたとき、県令神田幸平が官司に大物を迎えようと宮岡鉄斎をくどいて承諾させたので神宮と

抗主義を實踐し、貧民へは献身的に奉仕した。青年たちは彼の献身的奉仕に心服して「イエス団」を組織して彼をたすけた。新川に入

して神戸に数年とどまっていた。大和絵から南画を描く、その作風は高潔清澄、数多くの傑作を残したが、晩年は帝展技芸員、帝國美術院会員にも推された。村上華岳（一八八八～一九三九）は大阪の医師武田誠三の長男に生まれたが京都美術工藝学校に在学中村上家の養子となり、文展に出品。第十回展阿弥陀三尊が特選となつてから日本画家としての存在を確立。小野竹喬、入江波光、土田麦遷らと文展に反旗を翻して国画創作協会を興して活躍したが、昭和四年（一九二九）国会の解散後は神戸に隠棲して仏画一休の境に専念した。洋画家金山平三（一八八三～一九六四）も神戸の人。黒田清輝門下の最優秀生として東京美術学校を卒えると渡欧してパリで精進。昭和三十三年（一九五七）芸術院会員となったが、大正五年（一九一六）第十回文展に滞仏中の作品「雨のガラスヒガール」が入選、翌年早くも無鑑査に推されている。風景画をよくしたが、帝展改組に反対して不出品、その作風は彼の人格のように清澄で、みずみずしい色彩をもつが画商、画壇ともつきあわず晩年まで孤高の境地を堅持した。川西英（一八九四～一九六四）は兵庫区東出町に生まれたが、国画会会員の版画家、題材によくサーカスを選んで描き「サーカスの川西」といわれたが、明るくモダンなタッチと鮮やかな原色で「兵庫百景」など風景画を多く遺した。洋画家林重義（一八九六～一九四四）は生田区中山手通に生まれた。昭和三年（一九二九）小杉和作、林俊衛と共にパリに渡り制作。はじめ二科会に属していたが、昭和五年、里見勝蔵、林武らと「独立美術協会」を結成したが超現実派の台頭で脱退。国画会に属した。「舞妓」「しゃくやく」などの傑作を残したが、特に後輩の育成に尽した。小出楯



井上秀

儒者となったが、安政四年（一八五七）新藩主信民の時、領民の資財と義援で藩校「崇広館」を創立した。門下生から田健治郎、津

田要などがある。同じ氷上郡春日町山田からは日本の女子教育に尽くした家政学者井上秀（一八七五～一九四六）がいる。秀は、夫井上雅二をして「妻はよき大学長でもあり、よき主婦でもある」といわしめている。明治四十一年アメリカに渡りコロンビア師範学校で家政学を、シカゴ大学で経済学を学び二年後に帰国といったように活動しながら三児の母として多忙だが、よく尽している。まさに模範的な良妻賢母であった。野口ゆか（一八六六～一九五〇）は姫路藩士野口野の長女として生まれた。明治十一年（一八七八）姫路中学にただひとりの女学生として入学したが、紅一点をいじめて勉強できないので退学、この時の同級生に歴史学者三上参次（一八六五～一九三九）がいたという。上京して東京女子高等師範を卒業。母校にのこって附属幼稚園の保母として残った。明治二十七年華族女学校の保母となったが女子学習院に改組後も教授として残った。明治三十年貧民幼稚園として二葉幼稚園を開設、生涯を幼児教育に尽した。小島省齋と並称され、但馬聖人といわれた儒学者池田草庵（一八一三～一八七八）は養父郡八鹿町宿南の人。讃岐高松の儒者相馬九方

重（一八八七～一九三一）も阪神間に居住したが、大阪生まれでその活躍もほとんど大阪であった。その意味では芦屋市に住んだ吉原治良（一九〇五～一九七二）も大阪生まれで、戦後、前衛美術活動の拠点となったグタイミナコチカも大阪市内ではあったが、芦屋市展を中心に県下の若い美術家たちの啓蒙、育成に果たした役割は大きい。明治・大正生の画家では瀬戸内海に面した画家の作風は明るく、前衛的である。姫路の洋画家飯田摘朗（一九〇八～一九三六）は独立美術展第一回から海南賞、独立賞をうけて会員となったが、画風はフォーヴから超現実主義絵画に変わったが、非凡な画家であった。二十九歳の若さで没した。彫刻家笠置季男（一九〇一～）も前衛的彫刻家として著名だが彼も姫路生まれである。その意味では対称的な画家は但馬生野町生まれの青山熊治（一八八六～一九三二）であろう。明治四十三年（一九一〇）の白馬会展で「アイヌ」が白馬賞、同年の文展で「九十九里」翌年「金仏」で入賞、明治二十六年帝展に「高原」を発表、美術院賞を受賞したが、その画風は近代の哀愁をこめていようだ。生野には水彩画家白滝幾之助（一八七三～一九六〇）洋画家和田三造（一八八三）がいる。三人共に東京美術学校に学び黒田清輝門下の英才として後に文展審査員、帝展審査員と体制コースを着実に歩んでいる。丹波、但馬の学者、文人といわれる人達も概ね同じコースで成功した人が多い。

#### 藩校教育と瀬戸内の教育

氷上郡青垣町佐治には丹波聖人と呼ばれた藩政改革者小島省齋（一八〇四～一八八四）があり、柏原藩主織田信貞の敬信をあつめ

について儒学を学び、彼と同行して京都の塾で学び、近藤篤山、佐藤一斎を訪ね江戸に出て苦学力行、天保十四年（一八四三）但馬にかえって立聖会をつくって多くの子弟を育成、弘化四年（一八四七）「青給書院」を開設して塾生の指導教育に当たった。この書院を出た者六百数十人の多きに達した。教育行政につくした東大総長浜尾新（一八四九～一九二五）は江戸で生まれ豊岡で育ったが、草庵門下の一人であり、日本の外科的眼科医の開祖河本重次郎もそうである。久保田謙（文部大臣）猪子歳之助（京大外科教室の開設者）岡本梁松（京大法医学部の開設者）等々豊岡藩の「貢進生」として東京へ送った俊才たちである。兵庫県には眼科の名医が多い。柳田国男の兄井上通泰や、尼崎の中馬興丸などがある。但馬出石からは真理探究に生きた学者、東大総長加藤弘之（一八三六～一九一六）がいる。同じ出石町から明治女学校を創立。「女学雑誌」を発行して女子教育につくした巖本善治（一八六三～一九四三）がいる。妻は「小公子」バーネットの原作を翻訳して有名な若松財子である。昭和十二年（一九三七）林内閣の文部大臣就任を要請されたが辞退した。美方郡浜坂には石川啄木とらび称された薄幸の歌人前田純孝（一八八〇～一九二一）がいる。姫路出身の詩人前田林外（一八六四～一九四六）岩野泡鳴らと与謝野鉄幹の「明星」を離れて「白百合」によったが、三十一歳で夭折した。仏教史学者として第一人者といわれた村上專精（一八六八～一九二七）は氷上郡春日町野山の生まれだが、姫路市西塩町の一寺に小僧となって苦学した。東大教授・学士院会員となったが仏教史学界に多くの功績をのこした。川本幸民（一八一〇～一八七二）は加東郡東条町の医師山中耕斎の次男

に生まれたが、三田藩川本周伯の養子となった人であるが、三田藩主九鬼隆国は将来必ず洋学が必要であると考え江戸遊学を命じた。隆国は同年金子十五両を送って彼を励まし、五年間に百五十両にもなった。その後、藩医となったが薩摩藩主島津齊彬にこわれて藩籍を移した。齊彬の逝去で薩摩を去ったが、「化学読本」「化学新書」などをはじめ「化学」と名づけた。火薬・写真・ビールなども作り、ほかに電信機・蒸気船の模型を作るなど日本の理化学の祖となった。明治になって新藩主九鬼隆義夫妻は旧習を廃してキリスト教と関係をもち、人材登用したのは川本幸民の影響といわれている。元良勇治郎は三田藩士の次男であるが、デヴィスや新島襄が同志社大学を開校すると第一回生として入学した。明治十六年（一八八三）渡米、ボストン大学、ホプキンス大学に学び、哲学、心理学、社会学を研修したが明治二十一年帰国して、東京文科大学で精神物理学講師となり、後わが国心理学の基をつくった。三田藩主九鬼隆義は福沢諭吉をひいきにして藩政改革の指導を受けていたが、わが国、美術行政と文化財保護について、岡倉天心やフエノロサの意見を深くもち、博物館の生みの親といわれた九鬼隆一（一八五二―一九三一）も前途有為の青年として福沢に紹介された一人である。明治二十九年古社寺の国宝と特別保護建造物の指定、官立東京美術学校の開設（明治二十二年）など文部省美術行政の中堅官僚となり、枢密顧問官、男爵を授けられたが、郷里三田に自分の集めた古美術を収めて県下ではじめての三田博物館を設立、大正三年（一九一四）公開した。

篠山藩主青山忠誠（一八五九―一八八七）が創立した鳳鳴義塾は、質実剛健、勤儉尚武を校訓としたが、明治十九年中学校令によって一府県一校に限ることになり、県下では姫路と篠山に二校あったため篠山中学校は廃校の運命になった。忠誠な郡内有志に寄附を呼びかけ、みずからも多額の年金を支出して再興させた。これが私立鳳鳴義塾である。質実剛健は明治教育の合言葉である。地域によって、その解釈、判断に差異があろう。篠山鳳鳴義塾の武裝行軍旅行などはそのスパルタ教育の最たるものであった。新時代の人間に期待する、それは教育者の意地でもあろう。

篠山鳳鳴義塾と姫路中学校を比較する時、その差異は著しい。姫路にも師団はあり、校風も質実剛健を旨としているが、教育は自由、進歩的であった。歴史学者の三上参次と同じく辻善之助（一八八一―一九五五）も姫路生まれで昭和七年学士院会員、東大教授。日本仏教史の権威者和田哲郎（一八八九―一九六〇）は姫路市仁豊野の人。日本古代文化を探索し、文化と自然をとおして人間を理解しようとする独創的哲学者でもあった。東大教授として倫理学講座担当。昭和二十四年学士院会員。国史学の権威といわれ史料編纂事業に従事すること三十年、東大教授、明治四十一年帝國学士院会員となった三上参次、経済学者土方成美、遺伝学の駒井卓、神戸高商校長水島鎮也、東京市長で俳人の永田秀次郎（青学）衆議院議長清瀬一郎など各地の英才が集まっている。また元良勇次郎亡き後のわが国心理学の権威者となり、昭和九年広島文理科大学総長となった塚原政治（一八七二―一九四六）も姫路市生まれ。姫路中学校の卒業生である。殊に水島鎮也（一八六四―一九二八）は豊前中津藩の出



柳田国男

に及ぶ。昭和二十六年（一九五五）文化勲章、芸術院会員となった。秀才ぞうの兄弟としても有名で長兄松岡鼎は医師。次兄井上通泰（一八

身。叔父が西郷軍に合流して戦死。父は急死し、一家離散したが長男の彼は姫路の伯父に引きとられた。姫中卒後、県立神戸商業講習所に入學。この学校の創立には郷里の先輩福沢諭吉が関係していたので中津出身者が多く、中津の開運社の給費生に選ばれ、明治十七年開校された高等商業学校（一橋）第一回生として入学した。明治三十六年（一九〇三）官立神戸高等商業学校（神戸大学の前身）初代校長に任ぜられた時は三十九歳の若さであった。日本の高等教育史上、帝大でない高商の出身者が校長になったのは彼が最初である。彼の実業教育観と予科を二部に分け第一部を中学卒、第二部を商業卒として一般科目と商業科目をそれぞれの修得課程において課し、本科に進学した時は同等の学力にそろえて進ませる制度をしいた。これは大学進学について傍系として押えられていた商業学校の秀才に明るい希望をあたえた。彼は少壮気鋭の教授を迎えて、教授一人に学生約十人を分属させる「研究指導制度」（のちのゼミナール制度）を全校に全面的に実施した。「自由」と「真摯」をモットーとし、「協同」の精神に満ちあふれた学校とした。大正九年、東京高商は商大に昇格したが、それから九年間、大学昇格運動に全校あげて運動を展開、目的を達したが、大正十四年辞職。追慕碑の遷文に、平凡偉大、無為にして万人を感化した名校長とある。

播州福崎には日本民俗学の父柳田国男（一八七五―一九六二）がいる。大正八年貴族院書記官長を最後に官界を去った。四十五歳である。大正九年（一九二〇）朝日新聞の客員、論説委員となったが、彼の郷土史研究は明治四十年（一九〇八）頃からで民話・民芸郷土史を巡歴調査、民間伝承の会、民俗研究所を設立、著書九十冊



三木清

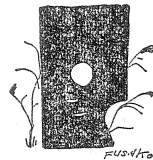
おり、内海信之、矢野勘治も龍野である。「生の存在」を説いた悲劇の哲学者三木清（一八九七―一九四五）の出生の地でもある。すぐ隣りの相



生市からは平和の鐘を鳴らしつづけた政治学者大山郁夫（一八八〇～一九五五）が出生。高砂市からは天皇機関説を唱えた憲法学者美濃部達吉（一八七三～一九四八）が出生。三木清の獄死、大山郁夫のアメリカ亡命、美濃部達吉の暴漢狙撃。すべて暗い歴史の断層におきた、しかも真理の追究に真面目であった人たちの受難であるが、何故かやり切れないような翳りを、この三人からは感じられない。それは彼等の清教徒的なヒューマンな人格によるものか、それとも瀬戸内海という明るい陽光と播州人間の逞ましい開拓性によるものか。加古川からは「壺坂靈驗記」の作詞作曲をした文楽三味線の名人豊沢国平（一八二七～一八九八）が出ており、人形浄瑠璃で昭和三十三年（一九五八）ソ連から招待された淡路源之丞（一八九六～一九六四）パイプオルガンを発明し、音響学の權威者田中正平（一八六二～一九四五）が淡路の人。盲目の箏曲演奏家、作曲家であり、若くして新日本音楽を提唱、十七絃琴と大胡弓を創案した宮城道雄（一八九四～一九五六）は神戸に生まれた。また講道館柔道の創始者、日本体育界の父といわれる嘉納治五郎（一八六〇～一九三八）は神戸、御影の生まれ。中国の古銅器・陶器の収蔵で著名な「白鶴美術館」の嘉納治兵衛（七代目）（一八六二～一九五一）は奈良の生まれだが明治二十年（一八八七）嘉納家の養子となった人。南蛮美術収集家として「池長美術館」を建て、わが国植物学の泰斗牧野富太郎のために自宅に植物研究所を設けて、彼の研究を大成させた池永孟（一八九一～一九五五）も兵庫の素封家の長男である。

## 明日へ

そして現代、明治大正の芸術家として時代のエポックを画した民衆派詩人、富田碎花、昭和モダニズムの竹中郁、作家稻垣足穂・絵画の小磯良平、東山魁夷たち、その他の人たちはいまも活躍中であるが、しかし、一人の偉人、一人の芸術家の時代はようやく去りつつある。兵庫県出身で、東京で活躍中の著名文化人は現在百指に余るであろう。だが、現代はむしろ文化の向上、振興によって地域社会の住民のレベルは広く、厚くなり、価値の多様化はさまざまな文化を地域に定着させつつある。美術ひとつをとっても、兵庫県レベルと美術人口は東京、京都に続く。明治期の名もない民衆の子孫が、ようやく神戸市に定着し、新しい伝統を創造し始めたのである。（詩人）

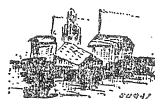


人物を中心とした

## 文化郷土史

—奈良県—

乾 健 治



## はじめに

奈良県は、もと大和といい、「国のまほろば」といわれ青垣山めぐる真の秀でた聖地であり、日本の歴史のふるさとである。自然の美しい大和の風土こそ日本人の心のふるさとである。特に奈良市は、奈良朝七代七十余年の都の地であり、日本の古美術・芸能の発祥の地である。古代人も現代人も永遠に住み場所をここに求めて、文学・芸術の花を咲かせている。万葉の歌人をはじめ能楽・茶道・連歌・絵画・彫刻・陶芸などに幾多の人物を輩出した。

しかし、明治維新の排仏毀釈によって多くの堂塔をこぼち、仏像を焼き古美術は破壊された。当時興福寺の五重塔もわずか五十四で売られようとしたこともあった。その後フエノロサによって古美術の価値を教えられて、奈良をあこがれて幾多の芸術家が再び集まってくるようになった。そして再び奈良文化・芸術が盛んになろうとしている。

## 彫 刻

維新以後に奈良県が生んだ一大名工といわれるのは、奈良人形中興の祖、一刀彫の森川杜園（一八二〇～一八九四）である。杜園は文政三年（一八二〇）六月二十六日奈良市井上町に生まれた。幼名は友吉で、父は「麦の中に混った一粒の米だ」と非凡の素質を喜んだ。友吉の奇才を愛したのは梶野良材で、奈良奉行の画の御用を命じた。時に友吉十六歳、全くの独習で刻苦錬磨し、春日野に出てて群鹿の姿態をみつめること数日、彫刻刀を手にするや夜半まで熱中

した。安政三年（一八五六）三十七歳で春日若宮大宿所屬となり春日有職奈良人形師の名をゆるされた。明治八年（一八七五）五十六歳の時、奈良博覧会社のために吉野如意輪堂の扉を模造してその妙技をたえられ、翌九年東京博物館から正倉院御物の模写を命ぜられた。明治二十六年（一八九三）シカゴの万国博覧会へ、おす・めすの大鹿を出品して日本美術の真価を世界に知らしめた。明治二十七年（一八九四）に有志の発起で聖武天皇の御像を依頼されたが、着手にいたらずしてその年の七月十五日七十五歳で没した。

杜園のあとを瀬谷桃源、中条良國、神箸東林、木島良宗、染川宗近、大林杜壽等が継ぎ、現在寺瀬三樂、竹林履中斎らが奈良人形、一刀彫を盛んにしている。

また東京芸術大学の助教菅原安男（一九〇五～）は奈良市出身で、奈良の古美術研究を基盤にして彫刻の勉強をし院展や新制作協会に作品を出している。

加納鎮哉（一八四五～一九二五）は岐阜に生まれる。造酒家の二男、本名光太郎、十二歳で母を亡くし、出家し仏門に入る。雪潭老師に師事し仏画を専らにしたが、二十三歳で還俗して岐阜の加納家を相続した。名を鎮哉と改め、鉄筆彫刻をもって世に立とうと決意した。三十歳で結婚して東京に出たが、初めは、傘の柄や仙媒（茶盒）を製作して糊口をうるおす生活苦とたたかった。たまたま市井の店頭に出された一つの仙媒が、時の宮中顧問官佐野常民の目にとまり、明治天皇の御前で鉄筆彫刻の妙技を天覧の光栄に浴した。三十七歳の時に文部省の嘱託を受け国宝取調係となる。やがて明治二十年（一八八七）文部大臣の命により古美術調査のため奈良の神

社仏閣の宝物調査の際に、東大寺塔頭真言院に宿泊した。フエノロサが来日していて法隆寺夢殿観音秘仏の白衣を解いた時の案内者は鎮哉であった。東京美術学校の創設の際、教授となり彫刻を担当し「東に加納鎮哉、西に富岡鉄斎あり」といわれた。官命により正倉院御物の伎楽面を模作したが、真偽の鑑別がつかず斯道の鑑定家を驚かした。大正七年（一九一八）に春日大社の南隣荒池畔に、更に池ノ町に住み、その後高畑町に数奇をこらした二階建て茅葺き大和天井、拓本ばかりのふすまと障子の最勝精舎を建てた。

鎮哉は鉄筆と毛筆をもって世に立ち、師匠なしで全くの独創で美術界の霸王となった。大正十四年（一九二五）十月二十八日八十一歳で没した。墓は奈良市の空海寺にある。

門人としてあとを継ぐ第一人者市川鎮環（一九〇一～）は、本名虎藏、東京調布の生まれ。十五歳で鎮哉の門に入り大正七年師とともに奈良へ移り、鉄筆一本で伝統工芸に打ち込んでいた。一刀彫の長老として奈良市の功労者表彰を受けている。

仏像修理に四十余年という彫刻家新納忠之介（一八六八～一九五四）は鹿兒島の生まれ、東京美術学校彫刻科卒業の翌年に同校助教となる。明治三十年（一八九七）の初め、奈良に出張を命ぜられたのは、美術学校分校の敷地選定のためであった。岡倉天心が日本美術院第二部を奈良に創設し、新納忠之介は、その主事に命ぜられた。日本美術院第二部は大正二年奈良美術院として独立した。昭和十年まで約四十年間に、彼の手による国宝修理数一千二百五十六点、神仏像二千四十一件、工芸品七十一件、実に偉大なる存在である。

奈良、京都の文化財を戦災から守った恩人ワナ博士とは、親交四十余年も続いた。最初岡倉天心の紹介で日本美術研究を目指して来日したワナ博士は、時に二十八歳であった。「新納さんは私の先生でした。」とワナ博士は語っていた。新納は昭和二十九年（一九五四）動脈硬化のため奈良市雑司町の自宅で死去した。時に八十六歳であった。

奈良美術院二代目は明珍恒男が継ぎ、細谷而崇、鷲塚与三松、久留春年、吉川政治、栗津觀三郎などは、同美術院関係の人たちである。

奈良美術院の仏像修理に携わり五百体ほど仕事したのは、奈良市鍋屋町の竹林高行である。その子薫（一九〇三〜）は、十五歳で父に仏像彫刻を習い奈良の伝統彫刻の振興と後進の養成に努め、神道彫刻を創成、印度へ仏蹟視察している。この門下に福井庸賢がいる。

太田古朴（一九一四〜）は、奈良市北半田中町で奈良美術会を主宰し、仏像修理とともに石像美術研究に没頭し『大和の石仏』『石仏山の辺』『大和石仏観賞』などの著がある。

## 陶 芸

赤膚焼の中興の陶工奥田木白（一八〇〇〜一八七一）は、大和郡山市堺町筋の柏屋武兵衛という郡山藩の御用達でその三代目が木白である。寛政十二年（一八〇〇）の生まれ、五十四歳で禅門に入り、柏の一字を分かって木白と号した。石州流の茶道趣味の好事から陶器を作り始めた。赤膚山に通い続け、遂に大和陶工中の妙手となっ

た。明治四年（一八七一）二月十三日七十二歳で没した。

木白の作風は京焼きの系統を帯び、作品は多域にわたり雅味精巧で変化に富み、意匠の好みも優秀である。楽焼はその最も長ずる所である。仁清を模すに妙を発揮している。西大寺の大茶盛の大茶碗は木白の寄進である。

木白の子、木左は、その技、父に劣らず二代目木白となり、明治十二年（一八七九）六月二十五日五十四歳で没した。木白および木左の墓は円融寺にある。

松田正柏は大和郡山市中条に生まれる。西の京の赤膚焼を天下に紹介した功勞者である。昭和十二年（一九三七）一月五十五歳で没し息子富佐雄が二代目正柏を継承している。

尾西宗斎（一九一〇〜）は大和郡山市高田口に赤膚焼の窯をもち、昭和二十六年（一九五一）天皇陛下行幸の際に御前実験の榮に浴している。なお奈良市赤膚町には大塩正人（一九〇八〜）や古瀬堯三（一九三六〜）などの窯がある。

陶芸の極致、不世出の巨匠といえば冨本豊吉（一八八六〜一九六三）である。生駒郡安堵村の冨本豊吉の長男として生まれる。東京美術学校図案科を卒業、在学中に英国に留学しロンドンのケンシントン美術館に通った。

大正二年（一九一三）自庭に楽焼窯を作る。郷里の風物を写生し簡素で要を得た美しい模様を作り出した。同四年に本窯を築き、近江の信楽焼、肥前の波佐見焼を研究し、また韓国にも行き李朝白磁象嵌なども研究した。昭和十九年（一九四四）より東京美術学校教授となる。一時は高山へ疎開していたが、終戦とともに一切の職を

の生きた道」と考えている。

## 絵 画

大和各山陵の図を描いた画家岡本桃里（一八〇六〜一八八五）は八木町の呉服屋の息子、後に桜井市に移った。桃里は四条派の流れを受け、繊細な筆致で、特に鮎を得意として描いた。晩年は、勤王愛国の画家としての傾向を多分に作品の上にあらわした。御陵図にしても科学的な精密な観察と作図が施されている。桃里は後年、官命を受けて御陵守戸となり、橿原神宮創建を企てるなど大きな足跡を残した。

風俗改善の先駆者堀川其流（一八二五〜一九二二）は天理市富堂の生まれ。奈良に出て内藤其淵に師事し、特に鹿の絵に妙を覚え、一幅に鹿千匹を描き「千匹鹿の其流」といわれた。晩年は風俗改善の社会運動にのり出し大和一円から東京にまで及んだが、明治四十四年（一九一一）三月八十七歳で没した。長柄の長福寺に墓がある。

洋画界の重鎮であった大阪生まれの足立源一郎（一八八九〜一九七三）は、第一次世界大戦の中でスイス・フランス・イギリスで美術を研究し、大正八年（一九一九）日本に帰り、奈良市高畑町にアトリエを作って熱烈に奈良の古都を愛した。そこへ二科会の浜田葆光、山下繁雄、春陽会の若山為三、無所属の中村義夫、一水会の小野藤一郎などが来て住んだ。そのころ春陽会の入選常連画家には奈良県生まれの飯田衛、笠松春彦などがいた。

軍鶏画家山下繁雄（一八八三〜一九五八）は東京生まれ。十四歳

## 漆 器

漆器の美は日本美術の精華とされている。奈良漆器の吉田陽斎は春日大社の御用塗師で、奈良漆器の改良に立ち上がった人であり、その子立斎は奈良市手貝町に生まれ、明治二十年（一八八七）蜜陀油の製造に成功した。そして「天平の昔を今に生かすこそ奈良塗師

で洋画家小山正太郎の画塾に入った。後に太平洋画研究所に入る。第二回文展に「夏木立」「綾瀬川」が入選。その後、東京より大阪に移ってドンゾコ生活中から軍鶏の描写を始めた。その後さらに奈良に移り住む、昭和に入ってから帝展に「軍鶏」が無鑑査出品となる。県の文化功勞賞を受け、昭和三十三年（一九五八）九月七十六歳で没した。称名寺に葬らる。

岩井尊人（一八九二～一九四〇）は天理市丹波市町の生まれ、東京帝国大学卒の法学士。総は一高時代から始め、滯英八か年中に英國後期印象派の老大家クラウンゼンの内弟子となる。大正十二年（一九二三）王立大英美術院の名誉同人となり、アマチュア日本画家として大人気を博した。帰朝後、欧州巡礼のスケッチ二百点の個展を大阪・三越で開いた。なお、昭和十一年広田内閣の時、平生文相の秘書官を勤めた。

高橋立洲人（一九一三～）は愛媛県の生まれ。今は奈良市平松町に住む。矢野橋村に師事し、南画の真髓を究め、今や一新機軸を画面に躍如として個性の強い画家である。日本児童美術協会主宰、立鼎会創立、日本南画院副理事長。「わがふるさとの奈良」の著がある。

野沢寛（一九〇八～）は明治四十一年五月二十二日大和高田市に生まれる。大阪美術学校卒業。帝展、文展、日展、新日展らに十三回入選。洋画家、桜井女子短期大学教授、東光会委員、県文化賞受賞、県展創立以来審査員、前高田市教育委員、高田洋画会創立委員、高田美術協会創立委員、高田洋画研究所主宰、関西総合美術展前審査員招待無鑑査。大和タイムス紙上に連載された中西清三著、



長編小説『万葉物語』および  
数景三著『大和武士』、山路  
麻芸著『大和路をめぐる』の  
前後編のさし絵を執筆、大和  
高田市北戸塩町八の九に現  
住。本県に生まれ、本県に居  
住の新進画家である。

## 書道

本県の生んだ昭和の代表的書家辻本史邑（一八九五～一九五七）は、磯城郡田原本町大安寺の吉田熊吉の二男で、本名勝巳。長じて辻本家を継ぎ、号を史邑という。奈良師範卒、二十三歳で文検（習字）にパス、日下部鳴鶴に励まされ書道に志を立て、二十七歳で全国書道会を奈良で開催した。中華民国に旅してその道の根源を研究した。寧楽書道会を作り機関誌『寧楽』を出し全国に書道の普及を図った。戦後は日本書芸院を創立し、その会長となり、日展運営にも参画した。書道教師で奏任官待遇を受けた第一号である。「関西の辻本史邑か、関東の鈴木翠軒か木段曲水か」と世にうわさされた。「書は腕で書くべし」と「習字教育の根本的革新」の著書を出した。「昭和新聞法帖大綱」三十六冊がある。昭和二十四年に県の文化賞昭和二十八年芸術院賞を受けた。

その後は日本書芸院審査員に奈良県生まれの乾鐘堂、平田華邑がいる。

## 和歌

奈良市山村御殿の文秀女王（一八四四～一九二六）は、伏見宮邦家親王の第七王女で、三歳の時から奈良市の円照寺に入られ大正十五年（一九二六）二月八十三歳で亡くなられるまで勤行の合間、筆硯を離さず、明治天皇に継ぐ歌人で、数万の遺詠がある。その一部は『宝樹和歌集』に出ている。

萩原蔵雄（一八三六～一九二四）は岐阜県の生まれ、御歌所の歌人で平田鉄風の門人。明治三十一年（一八九六）御歌所参候となり同四十一年天理教校講師として天理市三島に来る。大正十二年（一九二三）二月八十九歳で没し従五位勲五等に叙せられ、墓は奈良市の瑞景寺にある。

米田雄郎（一八九一～一九五九）は磯城郡川西村下永に生まれ、前田夕暮の門下。歌集『日没』『朝の挨拶』『青天』『忘却』『終焉の地』の五書を出す。結崎小学校に歌碑「ゆくところ真実なればみどりなす山あり川ありなつかしきかも」がある。

橿原市御坊町の辰巳利文（一八九九～）は十七歳から佐佐木信綱の指導で作歌し、竹柏会の奈良県支部として奈良文化学会を起し「奈良文化」を主宰する。『大和万葉地理研究』を刊行し、万葉講座の先駆けを成し、県文化賞を受けた。

堀内民一（一九一二～一九七二）は北葛城郡河合町佐味田の生まれ。万葉研究で文学博士となり、名城大学教授になる。歌集『はるかなる想ひ』『万葉大和風土記』の著がある。

前川佐美雄（一九〇三～）は北葛城郡新庄町忍海に生まれ、東

洋大学卒業。佐佐木信綱の門に入り、処女歌集『植物祭』を出し歌壇に新風を起こし、『日本歌人』は昭和新聞風の母体を成した。『天平雲』『金剛』『日本し美し』など三十余の著書がある。今も朝日新聞歌壇の選者である。

吉田宏（一九二三～）は、大正十二年十一月二十八日徳島市に生まれる。現在天理市川原城町八八の二に吉田産婦人科院を経営し、その院長、医学博士。



昭和四十五年四月十二日に  
山の辺短歌会を結成し主宰者  
となり、機関誌『山の辺』を

その七月から発刊し、現在六十四号に至る。同短歌会は、最近「山の辺のみち」が天理市を中心に世の関心を集めているところ、古典短歌の伝統を継承しながらも作風にとらわれず、個性を重んじ、各自が自由に実力の発展できるように努め、現代短歌の抒情を追求しようとする目的である。歌集に『夕冷えの階』（昭和三十九年刊）があり、昭和四十九年に『山の辺合同歌集』を出した。

## 俳句

藤岡玉骨（一八八八～一九六六）は、五条市内に生まれる。東京帝国大学出身で佐賀、和歌山、熊本の各知事を勤め、退官後は一途に俳句に精進し大和俳句会の選者、毎日新聞奈良版の俳壇選者。古稀の賀に『玉骨句集』を出す。

わんぱくに頭たかかせ表笛を 玉骨

女流俳人橋本多佳子（一八九九～一九六三）は本名多満、東京の生まれ。山口誓子に従い「天狼」に参加し、奈良市菅原に住んで、「七曜」を主宰し、県の文化賞を受けた。

阿波野青畝（一八九九～）は高取町の出身。虚子の門下で「ホトトギス」四S（青畝のほか水原秋桜子、高野素十、山口誓子）の一人である。同派の最高の地位を占めている。

## 浪 曲

浪曲師初代吉田奈良丸（一八五一～一九一五）は北葛城郡広陵町百済の出身。浪曲を吉田音丸に学んで、自ら刻苦してその妙を極めた。明治三十年（一八五七）の秋、法隆寺村の並松に移住した。時に門下生六十人余り、中でも下市の広橋広吉（一八七九～一九六七）は小奈良といふ門弟中の筆頭であった。これに芸名奈良丸を譲り、自ら竹廻家養徳齋と称した。二代目奈良丸も『大和桜義士の面影』の題本を製作し、当時関東に雲右衛門、関西に奈良丸ありと浪曲界を二分し、その名は世を風靡した。大正七年（一九一八）に日米親善と同胞慰問に渡米し大統領ウィルソンに謁見した。浪曲界の大御所となり鳩山文相のとき芸術徽章を授与された。後に芸名を三代目に譲り、自分は吉田大和之丞と称した。

## 能 楽

金春光太郎（一八八六～一九六二）は、金春流の宗家で奈良市高畑町にて金春七郎（七十六世宗家）の長男として生まれる。金春流は能楽五流中でも最も古い流派である。七歳にして春日若宮祭礼後に

ロギーを根底とし、その夢を實現しようとした実験的ユートピアであった。その理想は、自分も生き、他人も生き、全部も生きてお互いを犠牲にせず自由独立人ばかりの世界建設のために支部員の協力を求めて文化事業を営みたいというものであった。

また、大正十四年（一九二五）四月志賀直哉（一八八三～一九七一）は奈良市幸町に居を定めたが、昭和四年（一九二九）高畑裏大道の新居に移り、昭和十三年（一九三八）東京へ転宅するまで十三年間、奈良で生活した。新しき村奈良支部の後援者であったがやはり在任中は若い作家や弟子たちのメッカ的存在であった。志賀直哉は動物好きで日本熊の子を百円で譲り受けて、しばらく飼っていたが公園の猿舎へ寄贈している。

五条市出身の兵本善矩（一九〇六～一九六七）は、直哉奈良在任中の作家で昭和七年『文藝春秋』に『布引』が掲載された。もう一人の弟子加納和弘は直哉作の『蘭齋没後』の主人公でもある。大正の末期に『主婦の友』の巷万円懸賞小説に当選した湯浅賢吉は大和郡山市の歌人湯浅那羅の舎弟である。

女流作家池田小菊（一八九二～一九六七）は和歌山県生まれ。県立和歌山女子師範を出て大正十年（一九二二）ダルトンプラン實際化のために、奈良女子高等師範の付属小学校へ招かれて教鞭をとった。朝日新聞の懸賞小説に『帰る日』が入選し、これが処女作で直載の門をたたき、その流れを汲んで香高い作品を発表した。昭和十八年（一九四三）に『奈良』を刊行し、また大和文学会にも参加し、終戦後は県婦人会館に居て県婦人協会会長を勤め、『婦人奈良』を刊行した。奈良市正暦寺にその文学碑がある。

宴能に子方に出る。二十八歳で宗家を相続し、昭和十二年（一九三七）六月貞明皇后に県公会堂庭苑で「春日龍神」を台覧に供し御旅情をお慰め申しあげたことは有名な語り草となっている。奈良市文化功労賞を受け、昭和三十七年（一九六二）五月七十七歳で永眠した。奈良市の念仏寺に葬らる。

## 文 芸 作 家

直木三十五（一八九一～一九三四）は本名植村宗一、父宗八は北葛城郡広陵町大野の出身。三十五は明治四十三年（一九一〇）十一月吉野郡西吉野村白銀北、奥谷尋常小学校で代用教員をしていた。上京して早大英文科に入る。二十九歳で青野季吉などと雑誌『新潮』を出し、また久米正雄、吉井勇らと同人雑誌『人間』を経営した。三十一歳の時、植村の植の字を二字にして直木三十一をペンネームとし、毎年一を加えて三十五で打ち切った。『文藝春秋』『苦楽』などに関係し、処女作『心中雲母坂』を書き、奈良市下三条町に住み連合映画芸術家協会を設立し芸術映画製作に尽力し、昭和二年より原稿生活に入り『南国大平記』を書き大衆作家としての地位を確保した。大衆物を純文学の地位にまで押し上げた。また文芸院の創設に奔走していたが、昭和九年（一九三四）二月二十四日四十四歳で没した。その著作に『直木三十五全集』二十巻がある。

「新しき村」を創設した武者小路実篤（一八八五～）は、その村を出て大正十五年（一九二六）一月奈良市水門町に住んだ。新しき村奈良支部は猿沢池畔の北村信昭方に置かれ、例会、講演会、劇の公演なども相当活発に催された。トルストイの人道主義的イデオ

中西清三（一八九九～）は桜井市芝に、明治三十二年六月十二



日生まれる。奈良県立畝傍中学校を卒業、早稲田大学中退。文学と思想に悩み、一灯園、禅寺、新しき村などの思想・信仰に関する団体に入る。爾来、仏教、キリスト教をはじめ、既成宗教の門をたたき、

また新興宗教の門もくぐり、ひたすら道を求めた。その間、教員生活三十三年、橿原市立耳成中学校校長を最後として、昭和三十一年三月三十一日勇退、思索・執筆生活をつづけて今日にいたる。著作に長編小説『宮本武蔵』『宮本武蔵の最期』『静坐法の創始者岡田虎二郎』『ここに人あり―岡田虎二郎の生涯』『宮本武蔵の生涯』『万葉物語』全五巻、『親鸞』『戯曲・南禅寺の対局』『創作・額田女王』（月刊歌誌『山の辺』に五年間にわたって現在連載中）があり、人生作家として哲学・宗教味濃厚な作風である。日本ペンクラブ会員。上野凌弘（一九二二～）は、天理市三嶋に現住。岡山県に大正



元年十月三十日生まれる。東亜同文書院卒、満鉄参事、斉哈爾駅長。川端康成推せん作品『嫩江祭』により作家となる。大和タイムスに『花の裸像』一年半連載、昭和十五年『コタンの女―十津川移

民覚書』出版。川端康成推せん作品となる。昭和十八年『オロチ  
ンの裔』を出版。昭和四十九年『額田姫王』出版、昭和五十年『女  
王車弥呼』を出版した。昭和十六年に日本ペンクラブ代表として台  
湾、韓国に派遣、昭和四十七年中共視察。日本ペンクラブ会員。



山 路 麻 芸

女流作家、山路麻芸（一九  
二五〜）は桜井市三輪に生  
まれ、本名大谷真澄。奈良女  
子高等師範卒。現在県立ろう  
学校教諭である。日本ペンク  
ラブ会員。『大和路をめぐる』  
『続大和路をめぐる』の二著  
あり、丹羽文雄は「歴史を現代的解釈でゆがめることなく、すなお  
にうけ入れる暖かい眼をもっている。それがまた読むものに快い旅  
への誘いを感じさせる。」と序を寄せている。

評論家で美学の権威者保田與重郎は桜井市の出身である。

## 写 真

奈良市水門町に住む入江泰吉（一九〇五〜）は浪速短期大学教  
授でアマチュアカメラマン写真研究会光芸クラブを主宰し、奈良風  
物の撮影に専念し、写真集『大和路』『仏像の表情』ほか十数種を  
出版し、県文化賞や日本写真協会写真功労賞を受けている。

ほかに吉田晔々、藤井辰三などがある。小川晴陽は写真技術につ  
いて最高の修練をした人である。

## 琴

山本雨室（一九〇三〜）は、明治三十六年八月十二日丸山貫長  
の子として奈良県に生まれた。現在は高市郡明日香村飛鳥の安居院  
（飛鳥寺）の住職。昭和五年（一九三〇）住職就任、昭和十二年  
（一九三七）寺門興隆に努力し管長より賞状を受け、同十四年日支  
事変の功により補権少僧都、昭和十八年勲八等白色桐葉章受賞、昭  
和三十四年寺門興隆により補権大僧都、昭和四十三年三月二絃琴  
（八雲琴）演奏保持者として文部省の無形文化財に選択される。こ  
の功により、権少僧正となる。

（元桜井市立萱森小学校長）





人物を中心とした

## 文化郷土史

—和歌山県—

久世正富



空青し山青し海青し

日はかがやかに

南国の五月晴れこそゆたかなれ

と、佐藤春夫が、郷土をたたえているように、和歌山県は滔々と流れる黒潮の海に臨み、木の国の名に負う緑の山々を連らね、空はあくまで明るく、いわゆる南国的風土に恵まれた土地である。

上代の奈良の都人たちも、早くからこうした風土にあこがれ、歴代天皇の和歌の浦や牟婁の出で湯への行幸と共に柿本人麻呂、山部赤人を始め多くの歌人たちの来訪となり、あまたの名作を残し、平安朝以降においても枕草子、催馬楽、平家物語、太平記等に、その名所風物がたたえられ、更に熊野三山信仰、西国三十三か所詣での全国的流行が郷土の文化的風土に及ぼした影響が多く、その中から生まれ出でた特徴ある人物も少なくないが、ここでは主題に従って明治以後の人物を中心に書くことにしたい。

## 一 作家

佐藤春夫 明治二十五年（一八九二）四月、現在の新宮市船町三丁目で生まれた。佐藤家は代々医家であった。医師で俳句をよくした父豊太郎は、その長男が生まれた時「よく笑へどちら向いても春の山」とよんで、春夫という名をつけたのだという。その住家は新宮藩の丹鶴城跡に近かったので、幼少の頃は友人たちといつもここ



佐藤春夫

であばれ回ったことが、晩年の作「わんぱく時代」に書かれている。

十二歳で県立新宮中学校に入学したが、在学中既に文芸方面で鋭鋒をあらわし、東京からやって来た文

を始め「お正月」「雪」などの童謡、唱歌の作詞者東くめは明治十年（一八七七）六月、旧新宮藩主水野家の家老職由比甚五郎の長女として生まれ、新宮市の丹鶴小学校から大阪のウイルミナ女学校を経て十四歳で東京音楽学校選科に入学、ピアノと作詞を勉強、更に専修部にはいって二十歳で卒業した。在学中秀才の名が高く、卒業と共に東京府立高女の音楽教師となり、二十二歳で当時東京女高師の教授だった東基吉と結婚した。

「鳩ぽっぽ」が作られたのはその頃で、作曲は「荒城の月」で有名な滝廉太郎であった。滝は彼女より二年級下の学生だったのである。くめは大正六年から大阪府の池田市に移り住み、若い人々にピアノを教授していたが、昭和三十三年十二月末のNHKの「私の秘密」で、長く世間から忘れられていた「鳩ぽっぽ」の作詞者だったことが全国に知られた。これを知った出身地新宮市でも、すぐに彼女を名譽市民に推し、新宮駅前とその歌詞を刻んだ碑を建て、昭和三十七年七月彼女を迎えて除幕式が行われた。彼女はまた在住地の池田市からも教育文化功労賞を受けたが、昭和四十四年三月五日死去。勲五等宝冠章を贈られた。

有吉佐和子 は昭和六年一月和歌山市で生まれた。父は東京の有吉真次で彼女はその長女であるが、母は和歌山県政の大御所で衆議院議員になった木本主一郎の娘である関係で、佐和子の少女時代の約半分は和歌山市で過ごすことになった。

士などから注目され、明治四十三年上京して与謝野寛の新詩社に入り、また永井荷風を慕って慶応義塾の文学部に学び、始めは詩人として認められ、後「田園の憂鬱」により一躍小説家として認められ、続いて多くの作品を発表した。昭和三十五年文化勲章を受け、翌年郷里新宮市においても名譽市民に推されたが、昭和三十九年五月六日心筋梗塞のため東京の自邸で没した。彼は最も故郷を愛した作家だといわれ、国鉄勝浦駅前には「さんまの歌」の碑が建てられ、また新宮市の速玉大社境内に「望郷五月歌」の詩碑があり、郷里の人々是我等の春夫として、いつまでも敬慕の心を惜しまない。

東くめ

鳩ぽっぽ 鳩ぽっぽ ぽっぽぽっぽと飛んでこい

お寺の屋根から おりて来い 豆をやるから みなたべよ

たべてもすぐに かえらずに ぽっぽぽっぽと 鳴いて

遊べ

彼女が今の和歌山市木本小学校の二年生の時に書いた「私の家族」という作文は担任の先生を驚かしたというから、やはりセンダンは双葉より香しかったのであろう。その後、正金銀行勤務の父の任地ジャカルタやスラバヤで過ごしたこともあるが、戦争で帰国し、戦後の一年余りを県立和歌山高女に在学、昭和二十七年東京女子短大英文科卒業、昭和三十一年に雑誌「文学界」に発表した「地唄」が芥川賞候補、翌年にはまた直木賞候補にあげられて文壇に登場「紀ノ川」で有名となり、昭和四十七年の「恍惚の人」は老人問題をとりあげて広い階層の注目を浴びた。佐和子にはまた、「紀ノ川」以外にも「有田川」「日高川」「助左衛門四代記」「華岡青洲の妻」など郷土を背景とする作があり、昭和四十二年度和歌山県文化賞を贈られているが、演劇にも造詣があり、歌舞伎、舞踊劇、文楽などの脚本を書き、既に昭和三十三年にはテレビドラマ「石の庭」で芸術祭賞も受けている。

## 二 画家・彫刻家

紀州は徳川時代から祇園南海、野呂介石、桑山玉洲など有名画家の出たところであるが、明治以後においても全国的に名をなした多くの画家が出ている。

下村観山 本名は晴三郎、明治六年（一八七三）紀州藩の能楽師下村豊次郎の三男として、和歌山市の通称ぶらくり丁で生まれた。落藩のため一家は東京に移り、観山八歳の時、狩野芳崖の門に入



下村 観山

り、幼少よりその才を認められた。明治二十二年、フェノロサや岡倉天心らの理想が実現して東京美術学校が創立された時、観山は年が若く学歴もなく、受験資格がなかったが、同校の教授になった橋本雅邦の直門ということで入学を許可された。同級生には横山大観、菱田春草らがいたが、観山の技巧はクラスでも断然光っていた。

明治二十七年美術学校第一回の卒業生となり、直ちに同校助教となった。然し、明治三十一年の学校騒動で教官を辞任し、一緒にやめた雅邦、大観らと美術院創設に力を尽くした。彼の作品は従来の日本画に比べ、その絵に精神がはいっており、感銘度の高いものとして評価され、「弱法師」など絶品であり、インドの詩聖タゴールも深く感銘して、その模写を作って持ち帰ったという。「大原女」「大原御幸絵巻」「天心先生像」なども多くの人に知られた作品である。観山は昭和五年四月、食道ガンと診断されながら、描きあげた「竹の子」は最後の作となったが、それは死ぬ直前八日のことであつたという。

川端竜子 は明治十八年（一八八五）六月、和歌山市本町三丁目の呉服商川端信吉の長男として生まれた。本名は昇太郎、幼時から



川口 軌外

学校入学、翌年洋画団体五月会に加入した。明治四十四年師範学校を中退して上京、太平洋洋画研究所に入り、中村不折に師事したが翌年転じて日本美術院洋画部に入り、小杉未醒に学んだ。大正九年フランス、イタリー、スペインに留学。大正十二年にいったん帰国したが翌十三年再び渡仏、アカデミー・ロート、レジエ、オーザンファンの研究所に通い、ルノアールに師事して。昭和三年パリから二科会に出品した。そして翌四年帰国と共に滞欧作品を二科展に出品して二科会賞を受け会友となった。

しかし、翌五年二科を離れて同志と共に独立美術協会を起し、のち国画会に入ったが、晩年これをも脱退して無所属となり、昭和二十七年からベニス、ビエンナーレなど国際画壇へ進出した。軌外の画の明るさは紀州の風土から大きな影響を受けたものとして注目されたが、それだけに郷土の人々ともなじみが多く、昭和三十九年度第一回和歌山県文化賞を贈られた。軌外の死は昭和四十一年六月、七十三歳であつた。

建島大夢 彫刻家大夢は明治十三年（一八八〇）有田郡日物川村（現清水町）の豪農建島喜一郎の四男に生まれた。本名は弥一郎。叔父がアメリカ帰りの医師で大阪で開業していたので、大夢も明治

絵が好きで、内町尋常小学校への行き帰りに町の提灯屋の店先にたずんで提灯の紋などを書いているのを眺め、殊に五月の節句の鯉のぼりなど書いているのを見るのを楽しみにしたという。彼十歳の時、一家が上京、浅草や日本橋に住み、東京第三中学校に入学、四年生になった時、読売新聞社が企画した「明治三十年画史」に応募した川端少年の「西南戦争」「大観艦式」の二つが、堂々と大家に伍して入選、当時の中学生としては正に大金の金四〇円也の賞金を受けた。竜子は始め白馬会、太平洋画会などで油絵を勉強したが、大正二年渡米、ボストン美術館で見た東洋美術の美しさに心を打たれたのが原因で、帰国後日本画に転向した。

彼の作品は今までの「床の間芸術」的な日本画に対する革命ともいふべき大作であり、横山大観、下村観山に次ぐ日本美術院展の指導者と目されるに至ったが、一方では洋画から転じた竜子を異端視する者もあった。そうしたことから、彼は意を決して志を同じくする弟子たちと青竜社を創立主宰し、以来三十数年間、毎年の青竜会展は常に話題を投げ、竜子の豪放さと機知性が称揚された。彼の作としては、東京浅草寺の天井の画や大阪四天王寺講堂の大壁画は人の知るところ、昭和三十四年に文化勲章、昭和四十一年和歌山市名誉市民に推されたが、同年四月八十歳の高齢を以て没した。竜子はまた趣味として俳句をよくしホトトギス同人でもあった。

川口軌外 明治二十五年十一月、有田郡御霊村（現吉備町）の豪農川口嘉右衛門の次男として生まれる。明治三十九年和歌山県師範

二十八年叔父のもとに出て大阪医学校に入学、予科を終了したが芸術家を志し、家庭の反対を押し切って京都美術工芸学校に転じ、ここを卒業すると明治四十一年春更に東京美術学校に進み、苦学をしながら精進し、その秋第二回文展に苦心の彫塑「閑静」が入賞、学生ながら彫刻家として知られ、その後毎年文展に入選、大正五年の第十回文展には特選となり、大正七年には推薦、大正九年二月東京美術学校教授、昭和二年帝国美術院会員、昭和十二年帝国芸術院初代会員となり、日本美術彫刻界の大御所的存在となった。彼の死は昭和十七年三月、六十三歳であったが、「自分の墓は自然美のあふれた紀州の実家に近い所に建ててほしい」との遺言に従い、清水町の緑の山に包まれたところにまつられている。代表作の「子供」「坐せる女」「ながれ」など、今も知る人が多い。

保田竜門 明治二十四年（一八九二）五月、那賀郡竜門村（現粉河町）荒見の農家に生まれた。本名は重右衛門、家が貧しかったので、苦学して大正六年東京美術学校洋画科を卒業。この卒業記念作品「母と子」が第十一回文展に特選となり一躍画壇に進出した。翌七年日本美術院に入り、石井鶴三らと共に彫刻に精進することとなり、大正九年同院同人、まもなく英・仏・独・イタリア・アメリカなどに留学、三年にわたって、ミレー、レンブラント、セザンヌ、クールベらの名画を模写し、特にフランスでは巨匠ブルーデル、マイヨールについて彫刻を研さんし、大正十三年帰朝。その後、明治・大正名作展に出品した「クリスチヌ嬢」は、ロダンの作風を

受けた力強い表現で、近代美術史上高く評価されている。竜門は終始、在野の人、孤高の彫刻家として過ごして来たが、常に故郷を忘れたなかった人であり、現在の和歌山県庁舎中央の丹生都姫、高倉下の壁彫、南方記念館の南方熊楠像などの作を郷土に残している。また懇望されて昭和二十八年から昭和三十四年まで和歌山大学の教授に就任した。竜門は昭和四十年二月七十三歳で死亡、従五位勲四等を追贈された。

### 三 学者・教育家

南方熊楠 いまの天皇が

雨にけぶる神島を見て紀伊の国の

生みし南方熊楠を思ふ



南方熊楠

と、お詠みになった南方熊楠は、慶応三年（一八六七）和歌山市橋丁の商家南方弥兵衛の次男として生まれ、四、五歳の頃から本を読み、雄お小学校に入学した頃から漢字の音訓をおぼえ、十歳で文選を暗しようし、また古本屋へ行って太平記など立ち読みして暗しようし、数頁ずつ家に帰って筆記し、終に金巻を筆写してしまった。十二歳の時本草綱目や大和本草といった植物学の本を

写しとったのが今も残っているが、当時の大人たちが神童の出現として驚嘆したのもっともなことである。小学校を卒えて和歌山中学校に入学、中学を卒えてから上京。旧一高の前身である大学予備門に入学したが、間もなく退学して明治二十年渡米、アメリカで粘菌類を中心に植物の採集研究を進め、明治二十五年英国に渡り独学を続けた。幸いに当時の大英博物館長に認められて館員となって研究を続け、英国一流の学術雑誌に寄稿することができるようになった。亡命中の中国人孫文と親交を結ぶようになったのはこの当時である。

在外生活十四年、明治三十三年十月、故郷に帰った彼は、田辺市に居を構え、県下各地で植物の採集調査を続け、その間五十余の新聞雑誌に論文、随筆などを発表、生物・民俗・文学・宗教等の広きにわたり、十数か国語を解するといわれた世界的知識を以て縦横の筆をふるった。彼は奇行の人としても有名であり、家では大抵裸の生活だったといわれ、また明治四十三年に、政府の神社合併政策に、民俗学の立場から反対し、ブタ箱にぶちこまれた話は有名であるが、学問を愛好する精神と正義を守る熱情に溢れた奇人であり天才であったといえよう。昭和四年天皇陛下紀州行幸の際、田辺湾神島での植物御採集の際、南方熊楠はその案内役をつとめ、お召艦の上で御進講申し上げた。この文の始めにあげた陛下のお歌は、昭和三十七年再び紀州行幸の折、既に故人となっていた熊楠を追憶されてのお作である。熊楠の死は昭和十六年十二月、年は七十五歳であ

ったが、その後、白浜の番所山の植物園内に南方記念館が建設され、学術資料や遺品が保存されている。墓は田辺市の高山寺にある。

鎌田栄吉 四十二歳の若さで慶応義塾の塾長となり、大正十一年加藤友三郎内閣の文相にもなった鎌田栄吉は、安政四年（一八五七）和歌山市東長町に、鎌田鉄蔵の第六子として生まれた。明治七年十七歳の時、県学（旧藩時代の学習館）から第一回選拔生として慶応義塾に入学した。和歌山県と慶応との縁故は、幕末時代に於て、紀州藩が福沢諭吉を藩校の教官に招いたことがあり、その時諭吉は、自分は郷里の九州中津藩との関係で紀州に行けないが、将来塾を開いた場合は紀州からの学生を歓迎するという約束をしたのに始まり、後の小泉信三総長の父で和歌山市生まれの小泉信吉なども、早く義塾に学んで福沢の愛顧を受けたのであった。慶応義塾に入った鎌田は忽ち秀才の折紙をつけられ、わずか一年で卒業して直ちに同塾の教官に任命されたが、明治十一年和歌山県の招きにより県の自修私学館の校長となった。時に年僅か二十一歳だったという。その後の彼は或いは慶応にもどり、或いは鹿児島造士館（後の七高）や福沢の郷里の大分師範学校へ赴いたりしたが、終に衆望をになって慶応義塾の第三代塾長となり、貴族院勸選議員となった。文部大臣となったことは始めに書いたが、その後も日本教育界の大御所として帝国教育会総裁、枢密顧問官など歴任した。栄吉の死去は昭和九年二月、七十八歳であった。

小川琢治 冶金学の小川芳樹、史学の貝塚茂樹、物理学の湯川秀樹、中国文学の小川環樹らの父で理学博士だった小川琢治は、明治三年（一八七〇）牟婁郡田辺町（現田辺市）の儒者浅井篤の次男として生まれた。幼時は父の教えを受けていたが、明治十九年和歌山中学校に入學、卒業後一高に入學した。この頃京都で銀行員をしていた小川駒橋の養子となって学資を受けることになった。駒橋は初代和歌山市長長屋喜弥太の弟である。琢治は東大地質科に進み、更に大学院で研究した後、農商務省に奉職、明治三十三年フランスに出張、パリの万国博における日本の出品審査官として活躍したが、その時フランス地質学の權威ミシェル・レビー、岩石学のラ・クロアなどの教えを受けることができた。明治三十五年には中国大陸に派遣され、北支及び蒙古の地質を調査し、満洲の撫順炭田の将来性を研究発表して各方面の注目を浴びた。彼はまた、日本列島の地質構造に関する新しい研究を進め、地震についても大きな業績を残し、昭和十六年七十一歳を以て京都で没したが、最初にも記したように超一流ともいふべき学者の息子を四人も残したことが、ある意味では彼の最も大きな功績だといえよう。ノーベル賞の湯川秀樹については今更ら云々するまでもないが、秀樹は琢治が東京にいる時、麻布で生まれ、父の京都転任に従って京都で育った。昭和七年京大講師の時、和歌山県日高郡日高町出身で大阪で胃腸病院を開いていた湯川玄洋の次女と結婚して湯川姓となったことだけを記しておく。



下村海南 本名は宏、明治八年（一八七五）和歌山市鶴町に生まれる。父房次郎は旧紀州藩士で、県会議員、通信省官吏などした人で、海南はその長男。和歌山中学校から一高を経て、

東大法学部卒業。通信省の役人となり、欧州留學、帰朝後各種事業の改革に貢献する傍ら、中央・法政・早稲田等の大学で財政学を講じ、その方面の著書も多く、その後台湾總督府民政局長となり、六か年にわたり多くの功績を残している。大正八年法学博士、大正十年大阪朝日新聞入社。言論界で活躍し、昭和十八年NHK第三代会長となり、また昭和二十年四月鈴木内閣の國務大臣となった。終戦後は公明選挙運動に挺身、また国立公園の委員としても活躍したが、昭和三十六年八十二歳で没した。潮岬の望楼の芝に下村記念館が建っているのは、彼が生前その雄大な風光を愛し海南と号したところから、郷土の人々もその気持ちにこたえたのであろうが、一つにはまた海南が国立公園の委員として吉野熊野国立公園選定に力を注いだためでもあるという。

岡 潔 世界的数学者岡潔の父は橋本市の人であったが、潔は明治三十四年四月、両親が大阪市東区田島町に住んでいた時に生まれ、四歳の時父が日露戦争に出征したので郷里に帰った。幼ない時

から記憶力が抜群だったという。粉河中学、三高を経て京大理学部卒業、昭和四年京大助教となりフランスに留學、昭和七年帰朝して広島文理大の助教となったが研究に熱中する余り、講義がおろそかになり学校を追われたという逸話もある。昭和十五年理学博士となったが浪人の彼は郷里に帰って父が残した財産を売り食いしながら、貧しさのどん底生活をしていた。しかし彼の研究心はいささかも衰えず、田圃の道を歩いている時でも、思いついたら棒切れの端で数式を土の上に書いて難問を解いて行った。

その後、昭和二十四年奈良女子大教授に迎えられ、京大理学部講師を兼ね「多変数解析函数論」における世界的発見をたたえられて、昭和二十六年に学士院賞、昭和二十九年に朝日賞、そして昭和三十五年に文化勲章を受けた。郷里の人々は、岡先生はそんなにえらい学者だったのかと今更のように驚いたのである。昭和三十九年定年退職したが奈良女子大名誉教授の待遇を受け、今も奈良市に在住している。

#### 四 政治・宗教界の人

陸奥宗光 は明治の外交官の第一人者として推すに異論はなからう。この宗光が紀州藩勘定奉行伊達宗広の第六子として、今の和歌山市豊原町四丁目で誕生したのは弘化元年（一八四四）であった。幼名は牛鷹、長じて陽之助それから宗光。父は本居大平の門人で国学者歌人として有名であったが、宗光十歳の頃、父は勤王主義者で

あったので、御三家の紀州藩では排撃され、事を構えたとの理由で配流された。そのため彼はあらゆる辛苦をなめながらも不屈の精神に生き、十五歳の時江戸にのぼって安井息軒の門をたたき、また諸藩の青年達と将来を論じ研さんに努めた。土佐の坂本竜馬、長州の伊藤俊介（博文）や勝海舟などとも知り合い幅広い見識を養ったのもこの頃であった。

明治維新後は神奈川県知事などにもなったが、明治十年の役の時薩長閥中心の政府を転覆しようとする陰謀に連座して投獄せられた。幸いに伊藤博文らの取りなしで特赦を受けて和歌山に帰ったが、この時和歌山市民は市外まで彼を迎え、各戸に提灯をつけ、幟を立ててお祭騒ぎをしたというから、郷党の人々が如何に彼に期待していたかわかる。その後の彼は、山県内閣の農商務大臣、明治二十五年の伊藤内閣の外務大臣となったが、明治二十八年二月の日清講和談判に際し、伊藤博文と共にその衝に当たり、馬関条約を締結した功績は永く歴史に残るところである。しかし、元来病弱な体質であった彼は明治二十九年五月病氣のため官を辞し静養を続けたが、翌三十年八月東京で死去した。五十四歳であった。郷里和歌山の人々は宗光を慕って近年、和歌山市岡公園に銅像を建ててその偉業をいつまでもたたえるしろとしている。

山本玄峰 日本国憲法に天皇は日本国の象徴であるといったことが出てくるが、終戦後の内閣書記官長橋樑渡の談話によると、天皇は輝く象徴のようなものであると言いつ出したのは、紀州出身のこ

の山本玄峰という僧侶であり、また敗戦前、総理大臣鈴木貫太郎への、この山本玄峰の手紙の中に「大関は大関らしい負け方をしなさい。忍び難きを忍びなさい」といった言葉があったという。玄峰は昭和二十二年に妙心寺派の管長に推挙された禅僧であるが、彼は実に運命の子であった。

彼は慶応元年（一八六五）東牟婁郡の湯ノ峰温泉の旅館業西村家で生まれたが、この家は子供が多かったので母親は生まれた子を床下にたらいで蓋をしてほっておいた。すると、隣人がやって来て「昨夜お前さんの家でお産があったようだが、男か女か、男なら育てやれ。大きくなったら役流しにでもなれるから」というので、床下から出してみると、土地が温泉の温かみがあったので子供が死んでいなかった。この子が後の傑僧山本玄峰であったのである。玄峰は少年時代きこりと共に山に入り、或いは筏に乗って熊野川を下った。ところが、十八、九歳の頃、白内障をわずらい、病院で診て貰ったが、なかなかおらず、信仰によるほかなしと、四国八十八か所廻りをやり、四、五年の間に七回もめぐったという。その間に土佐の雪隠寺の山本太玄和尚に見出され、入道を決意、あらゆる難行苦行をして禅の修行をやり、目は不自由であったが、いわゆる心眼が開け、各地で荒廃した寺院を復興し、また六十歳の時から世界を遍歴し、更にインドの仏蹟を訪ねて帰朝、昭和二十二年選挙により管長にされたが、もとよりこうした地位を好まぬ彼は、一年半ばかりで辞任してしまった。かくて玄峰老師は九十六歳の長寿を保ち、

昭和三十六年六月、静岡県三島市竜沢寺の自坊で断食、遷化した。この禅僧については何といっても、最初に書いた憲法の天皇の地位についての言葉が最も注目せられるので、最後に、も一度これに触れておきたい。それは檣橋渡の談話に、老僧のことばとして「わたしは、天皇が下手に政治や政權に興味を持ったら、内部抗争が絶えないと思う。なぜかという、天皇の詔勅を受けているんだといって、天皇の権力を担ぎ廻って派閥抗争をする。だから、天皇が一切の政治から超然として、空に輝く太陽のごとくしておって、今度は、その天皇の大御心を受けて、真・善・美の政治を実現するということで、益々身を慎んで政治をすることになれば、天皇がおられても、もっと立派な民主主義国ができるのではないか。天皇は空に輝く象徴みたいなものだい」と語ったと記している。確かに時代を見通す、いい眼の僧であった。

（和歌山県文化財研究会理事）